

平成 10 年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

女塚遺跡・女塚 4 号墳

1999

埼玉県熊谷市教育委員会

平成10年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

めづかいせき めづか ごうふん
女塚遺跡・女塚4号墳

1999

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土、熊谷市には、私たちの祖先が日々と築いてきた、文化の証である埋蔵文化財を始めとする貴重な文化財が豊かに保存・伝承されてきております。こうした文化財は、地域の歴史・文化を今日に伝えるばかりでなく、地域の個性の一部とも言うべきものであり、今日における熊谷市の発展やその過程を雄弁に物語っていると申せましょう。ともすると、私たちは安全で快適な生活の実現に性急なあまり、私たちをはぐくんできた地域の文化遺産のありがたさを見失いがちですが、私たちは、地域全体でこうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市の形成のための礎としていかなければならないと考えているところでございます。

さて、女塚遺跡は熊谷市大字今井字女塚に所在する奈良・平安時代の集落跡で、女塚4号墳は古墳時代後期の円墳として知られていましたが、熊谷市は、同地に北部配水場の建設を計画いたしました。施設の性格上、記録保存の措置もやむを得ないと結論に達し、急速発掘調査を実施いたしたところでございます。

本書は、平成9年6月から12月に実施された発掘調査の成果をまとめたものでございますが、中でも女塚遺跡から「大倉寺」という寺院名が墨で書かれた土器が発見され、寺院名が書かれた土器は県内でも少なく、市内では初めてのもので、非常に重要な成果として注目されているところでございます。

本書を、埋蔵文化財の保護に関する資料として、また学術研究の基礎資料、あるいは学校教育や社会教育の参考資料として広くご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまでご指導、ご協力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、熊谷市水道部、並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成11年2月

熊谷市教育委員会
教育長 飯塚誠一郎

例　　言

1 本書は、埼玉県熊谷市大字今井字女塚462番に所在する女塚遺跡・女塚4号墳の発掘調査報告書である。

2 埼玉県教育委員会の指示通知は平成9年6月25日付け教文第3-220号である。

3 発掘調査は、熊谷市北部配水場建設に伴う事前調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。

4 発掘調査の組織は次のとおりである。

　調査主体者　熊谷市教育委員会

　調査担当者　社会教育課主幹兼係長（平成9年度は係長）金子正之

　事務局　　社会教育課長　大島常雄（平成9年度）

　　　　　　　氏家保男（平成10年度）

　副参事　　鈴木敏昭

　課長補佐　翠田晴夫（平成9年度）

　　　　　　　北俊明（平成10年度）

　主任　　権田宣行（平成9年度）

　主任　　寺社下博（平成10年度）

　主任　　渡邊操

　主任　　吉野健

　主事　　松田哲（平成10年度）

　発掘調査員　佐々木健策（平成10年度）

　発掘調査員　市川康弘（平成10年度）

　発掘調査員　秋本太郎（平成10年度）

5 発掘調査期間は平成9年5月26日～12月26日である。

　整理調査期間は平成10年5月1日～平成11年2月26日である。

6 発掘調査と遺物の写真撮影は金子が行った。

7 本書にかかる資料は熊谷市教育委員会が保管する。

8 遺構の表記記号は、次のとおりである。

　S A：櫛立柱建物跡　S D：溝跡　S J：竪穴式住居跡　S E：井戸跡

　S K：土坑　P：ピット　S X：集石遺構

9 遺構図中の斜線スクリントーンは地山を示す。

　遺物図中のスクリントーンの□は煤、□は灰釉、□は漆をそれぞれ示す。

10 遺構断面図の土層の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修1993年版）を参考とした。

11 本書の作成にあたり、新井端氏・森田安彦氏からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。

目 次

序

例 言

目 次

挿図目次

図版目次

I 発掘調査に至るまでの経過	1
II 発掘調査・整理調査の経過	1
III 遺跡の立地と環境	2
IV 女塚遺跡	5
1 遺跡の概観	5
2 遺構と遺物	6
(1) 掘立柱建物跡	6
(2) 住居跡	10
(3) 土坑・ピット	11
(4) 溝	14
(5) 井戸跡	25
(6) 遺構外遺物	25
V 女塚4号墳	28
1 遺跡の概観	29
2 遺構と遺物	29
(1) 周溝と石室跡	29
(2) 土坑	29
(3) 出土遺物	31
VI 調査のまとめ	33

挿図目次

第1図 周辺の遺跡分布図	2
第2図 中条古墳群分布図	3
第3図 女塚遺跡・女塚4号墳位置図	4
第4図 女塚遺跡・女塚4号墳調査区全体図	5
第5図 女塚遺跡全測図	6
第6図 1号掘立柱建物跡	7
第7図 1号集石遺構	7
第8図 1号掘立柱建物跡出土遺物	8
第9図 1号集石遺構出土遺物	8
第10図 2号掘立柱建物跡	9
第11図 2号掘立柱建物跡出土遺物	9
第12図 1号住居跡	11
第13図 1号住居跡出土遺物	11
第14図 1～7号土坑	12
第15図 2号集石遺構	13
第16図 8～10号土坑	13
第17図 7・9号土坑出土遺物	13
第18図 11・12号土坑、1・2号ピット	14
第19図 1～3号溝	15
第20図 1・2号溝出土遺物	16
第21図 4～8号溝(1)	17
第22図 4～8号溝(2)	18
第23図 6・10・12・13号溝出土遺物	19
第24図 9・13号溝	20
第25図 10～12号溝(1)	21
第26図 10～12号溝(2)	22
第27図 14～16号溝	23
第28図 14・16号溝出土遺物	24
第29図 16号溝出土遺物	26
第30図 1号井戸跡	26
第31図 遺構外出土遺物	27
第32図 女塚4号墳全測図(1)	28
第33図 女塚4号墳全測図(2)	29

第34図	1号土坑	29
第35図	女塚4号墳出土遺物(1)	30
第36図	女塚4号墳出土遺物(2)	31

図版目次

- 1-1 女塚遺跡・女塚4号墳航空写真
- 2 女塚遺跡航空写真
- 2-1 1号掘立柱建物跡
- 2 1号集石遺構
- 3-1 2号掘立柱建物跡
- 2 1号住居跡
- 4-1 1・5・6号溝
- 2 1~7号溝
- 5 2・16号溝遺物出土状態
1・2・5・8~10号土坑
- 6-1 女塚4号墳航空写真
- 2 女塚4号墳(南から)
- 7-1 女塚4号墳(東南から)
- 2 女塚4号墳埴輪出土状態
- 8 1号掘立柱建物跡・1号集石遺構・2号掘立柱建物跡・1号住居跡出土遺物
- 9 9号土坑、1・2・10号溝出土遺物
- 10 12号溝出土遺物
- 11 14・16号溝出土遺物
- 12 16号溝出土遺物
- 13 16号溝・遺構外出土遺物
- 14 女塚4号墳出土遺物

I 発掘調査に至るまでの経過

熊谷市水道部から熊谷市教育委員会あてに、市内今井字女塚に所在する北部配水場建設地内における文化財の取扱いについての協議が平成8年11月8日付けであった。熊谷市教育委員会は、当該地は周知の遺跡であり、試掘調査を実施する必要がある旨の回答を行った。その後、水道部から熊谷市長名での試掘調査依頼を2回受け、教育委員会は平成8年11月13・14日と平成9年3月10日に試掘調査を実施した。その結果、埋蔵文化財が確認されたので、その旨を水道部へ回答するとともに、現状保存の可能性をも含めた保存に関する協議を重ねた。しかし、事業の性格等から記録保存の措置もやむを得ないと結論に達し、発掘調査の実施が具体的に計画された。

女塚遺跡の発掘調査は、熊谷市教育委員会が平成9年5月26日から10月までに実施するということで双方が合意し、熊谷市長から文化財保護法第57条の3第1項に基づく発掘通知が、熊谷市教育委員会教育長からは文化財保護法第98条の2第1項に基づく発掘報告がそれぞれ文化庁長官あて提出された。こうして女塚遺跡の発掘調査が平成9年5月26日から開始された。その後、水道部の工事変更に伴い女塚4号墳も調査することとなり、熊谷市教育委員会教育長から文化財保護法98条の2第1項に基づく発掘報告を文化庁長官あて提出し、女塚4号墳の発掘調査が平成9年10月3日から開始された。

II 発掘調査・整理調査の経過

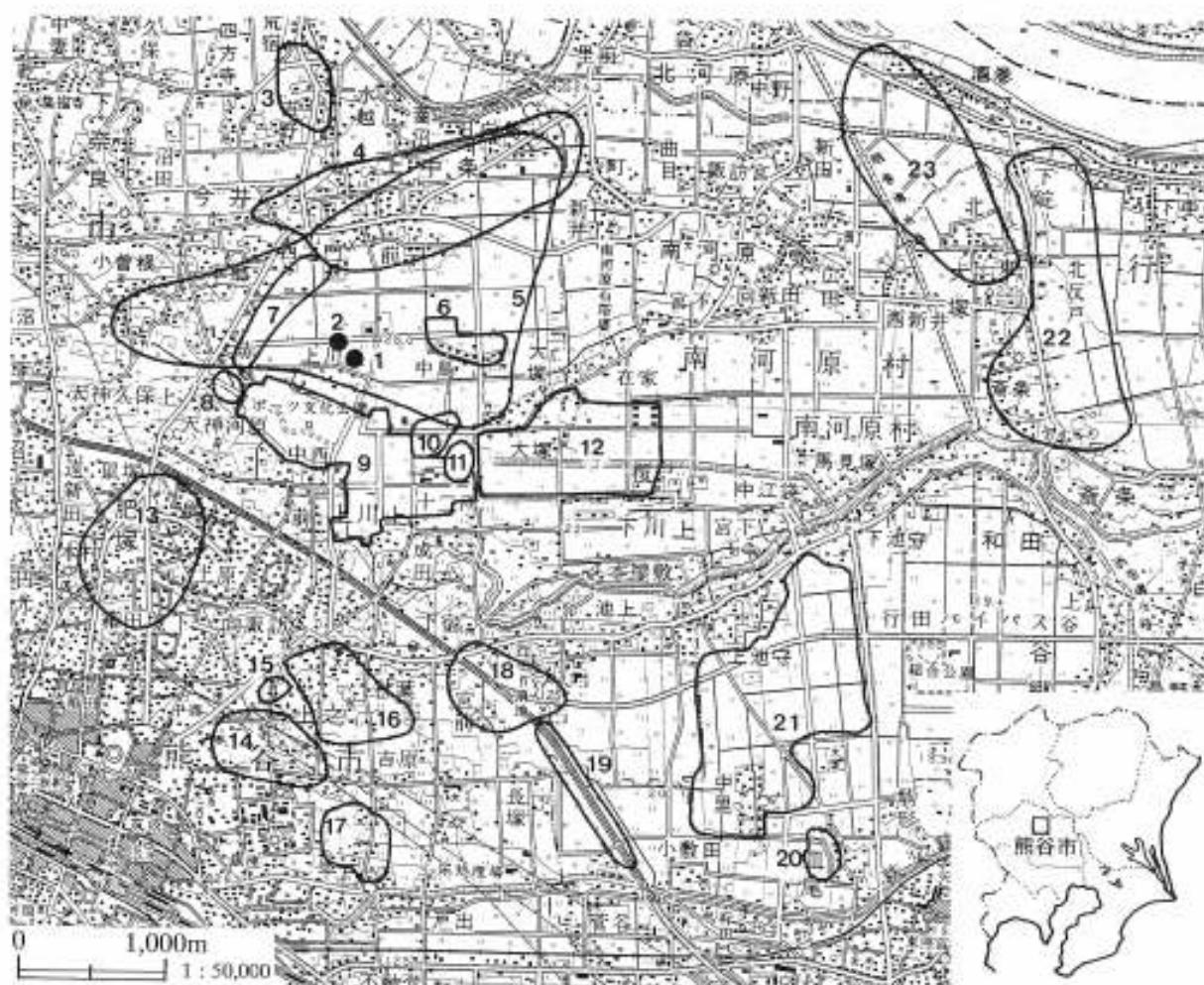
発掘調査は、女塚遺跡・女塚4号墳とも建物の建設予定地の部分の発掘を行った。1辺5mのグリッド方式を用いて調査を行い、南西隅をA-1として、北へ1、2…、東へA、B…とし、Aラインは、南から北へA-1、A-2…と呼称した。Bライン以東もAラインと同様に呼称してグリッド設定を行った。

調査区域の表土剥ぎを重機によって行い、人力により遺構精査を行い、遺構を確認した。女塚遺跡は掘立柱建物跡が2棟、堅穴式住居跡1軒、溝跡が16条、土坑が12基、ピットが2基、集石遺構が2基検出された。女塚4号墳は調査区の北西部分に石室の跡と、周溝の約五分の一が検出され、周溝のほぼ中央からは土坑が1基検出された。

遺構ごとに手掘りを行い、遺物出土状態の写真撮影・実測をした後、遺物の取上げを行った。遺構の写真撮影・実測を行い、遺跡の全体的な写真を撮り、最後に航空写真撮影を行い、12月26日に終了した。

整理調査は平成10年5月から開始し、遺物の洗浄・注記・復元・拓本取り・実測・写真撮影、遺構の図面整理を行い、遺構・遺物図面のトレース、遺構・遺物の図版組、原稿執筆、割付をして、平成11年2月に報告書を刊行した。

III 遺跡の立地と環境



- 1 女塚遺跡 2 女塚4号墳 3 光座敷遺跡 4 中条遺跡 5 中条古墳群 6 中島遺跡 7 赤城遺跡 8 天神遺跡
9 北島遺跡 10 田谷遺跡 11 天神東遺跡 12 東沢遺跡 13 肥塚古墳群 14 前中西遺跡 15 藤之宮遺跡 16 諏訪
木遺跡 17 平戸遺跡 18 池上遺跡 19 小敷田遺跡 20 皿尾遺跡 21 池守遺跡 22 斎条古墳群 23 酒巻古墳群

第1図 周辺の遺跡分布図

女塚遺跡と女塚4号墳は埼玉県熊谷市大字今井字女塚地内に所在し、各遺跡ともJR高崎線熊谷駅から北北東約3.9kmに位置する。標高24.7mで、北西方向から利根川、南西方向から荒川の両河川の乱流によって形成された沖積扇状地の末端に立地している。近年の発掘調査によって多くの遺跡が発見されているが、弥生時代から平安時代にかけての遺跡の分布状況を概観してみる。

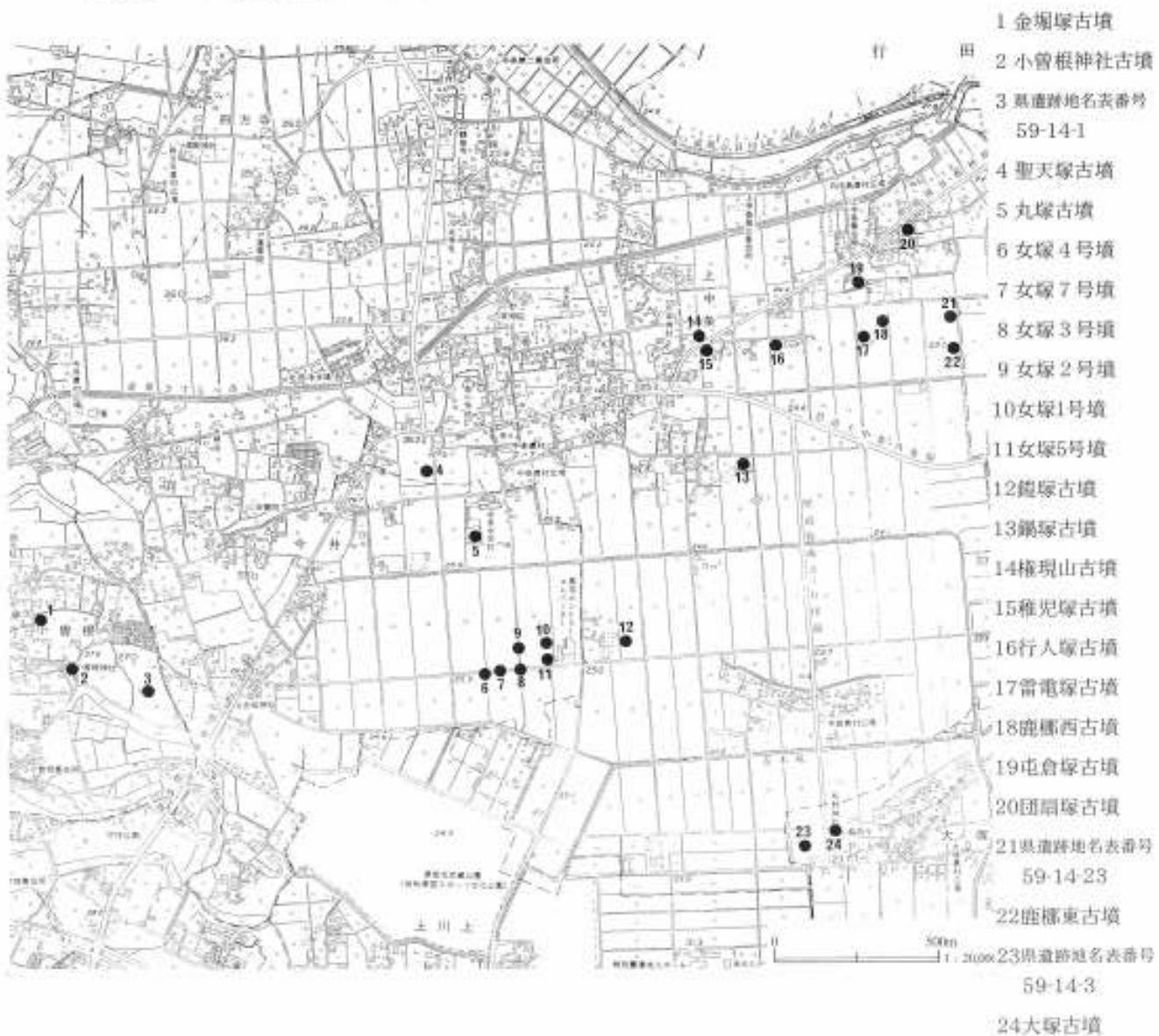
弥生時代の遺跡は、本遺跡の南側に多く分布し、自然堤防上に立地していて、中期の集落跡として有名な池上遺跡・小敷田遺跡があり、それらの西側に位置する前中西遺跡からは方形周溝墓とともに再葬墓も発見されている。弥生式土器が発見されている遺跡は天神遺跡・北島遺跡・平戸遺跡等がある。

古墳時代の集落は、自然堤防上に見られ、前期は本器等を出土した東沢遺跡・池守遺跡や、北島遺跡、小敷田遺跡、皿尾遺跡、池上遺跡等が点在している。中期は住居跡を検出した中条遺跡（権現山遺跡）

・北島遺跡等がある。後期になると、集落はその数を増し、面積も拡大する。中島遺跡、光屋敷遺跡、北島遺跡、池守遺跡等がみられ、本遺跡の南には、水の祭祀が行われたと考えられる諏訪木遺跡もある。

古墳については、女塚4号墳が属す中条古墳群は東西3km、南北2kmに分布し、須恵器器台を中心とした墓前祭祀跡を2ヵ所もつ帆立貝式の鐘塚古墳、二重周溝の帆立貝式古墳である女塚1号墳、形象埴輪を出土した女塚2号墳、角閃石安山岩切石の石室を有する大塚古墳、円墳の権現山古墳が調査されている。角閃石安山岩を使用した古墳は、肥塚古墳群、斎条・酒巻古墳群でも確認されている。

奈良から平安時代の集落跡は、古墳時代後期の集落跡に継続して検出される場合が多く、規模も大きいものがほとんどである。特に小敷田遺跡では、7世紀末から8世紀初頭の木簡を始めとする多量の遺物が出土し、池上遺跡では平安時代の建物群、綠釉陶器等が出土し、郡衙との関連を含めて重要な資料が提示され、諏訪木遺跡では長年大宝・人形木製品・斎串等が出土し、建物群が検出されている。

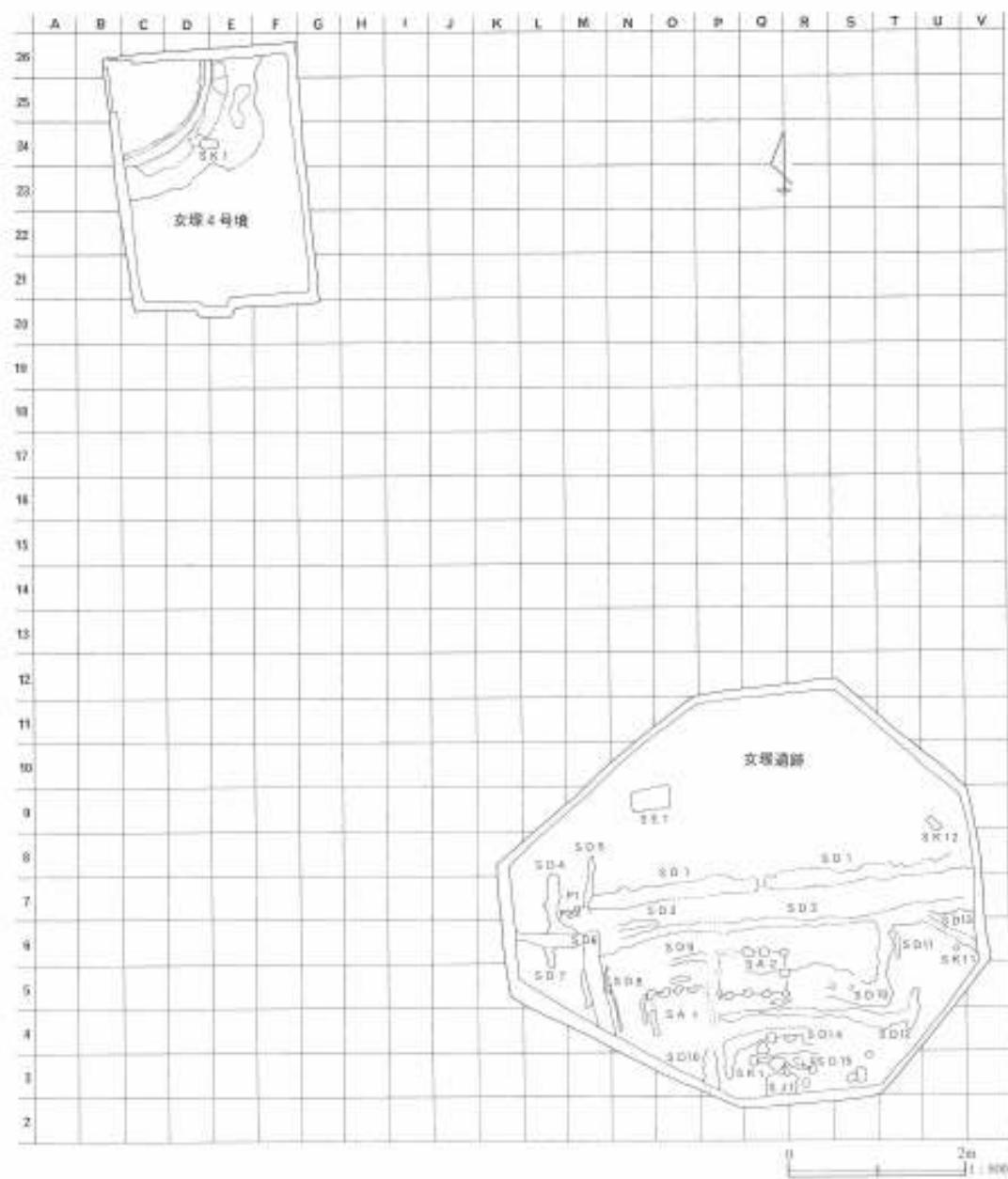


第2図 中条古墳群分布図



第3図 女塚遺跡・女塚4号墳位置図

IV 女塚遺跡

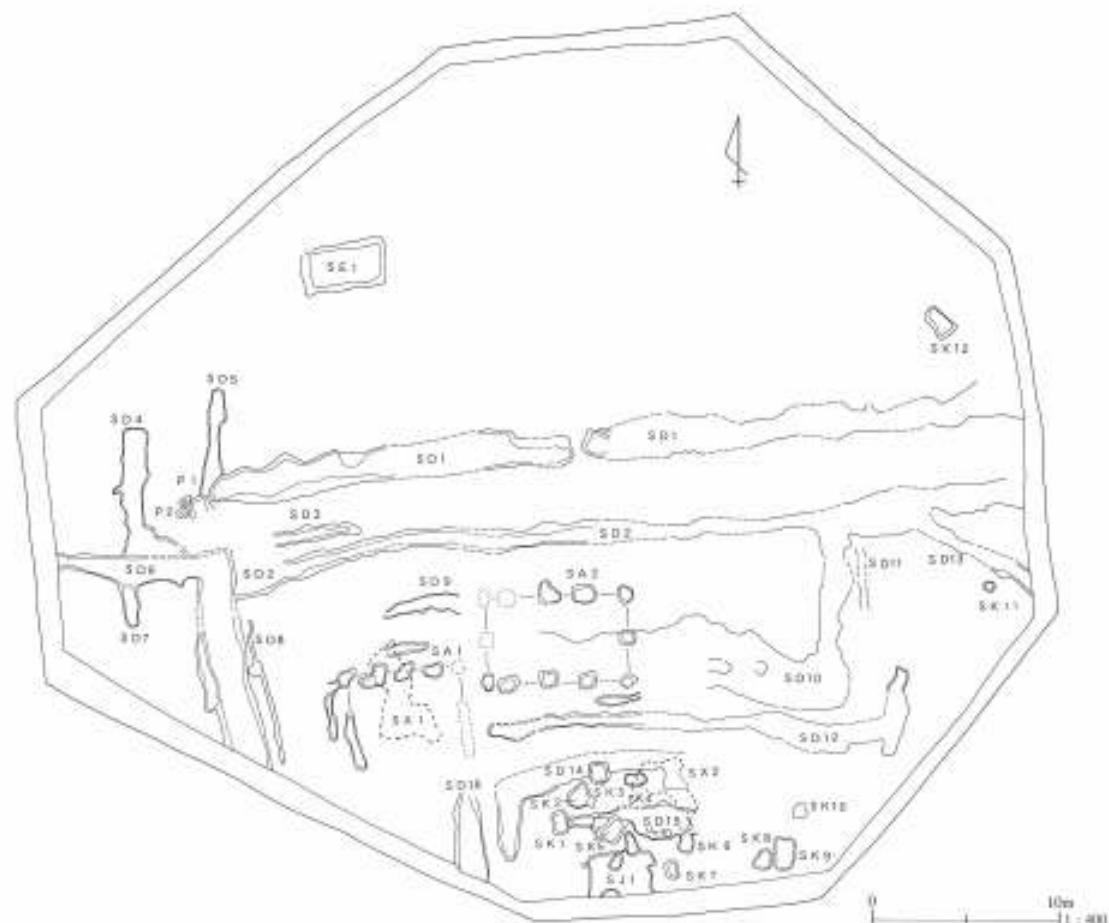


第4図 女塚遺跡・女塚4号墳調査区全体図

1 遺跡の概観

女塚遺跡は、JR高崎線熊谷駅から北北東約3.9kmに位置する。標高24.7mで、北西方向から利根川、南西方向から荒川の両河川の亂流によって形成された沖積扇状地の末端に立地している。

今回の発掘によって調査された遺構は、掘立柱建物跡2棟・集石遺構2基・住居跡1軒・土坑12基・溝跡16条・ピット2基・井戸跡1基が検出された。特筆すべきことは、溝跡から「大倉寺」と言う墨書のある土師器環が出土したことである。



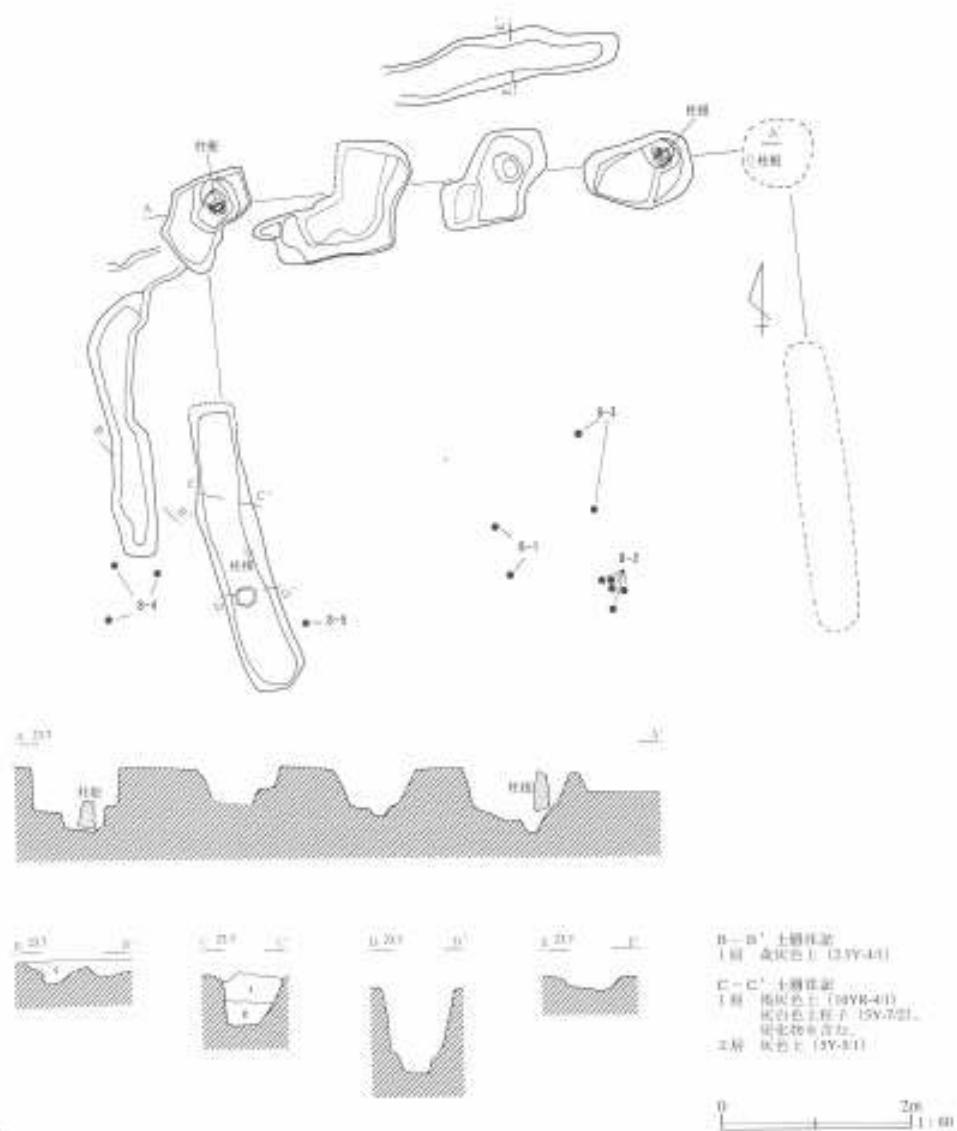
第5図 女塚遺跡全測図

2 遺構と遺物

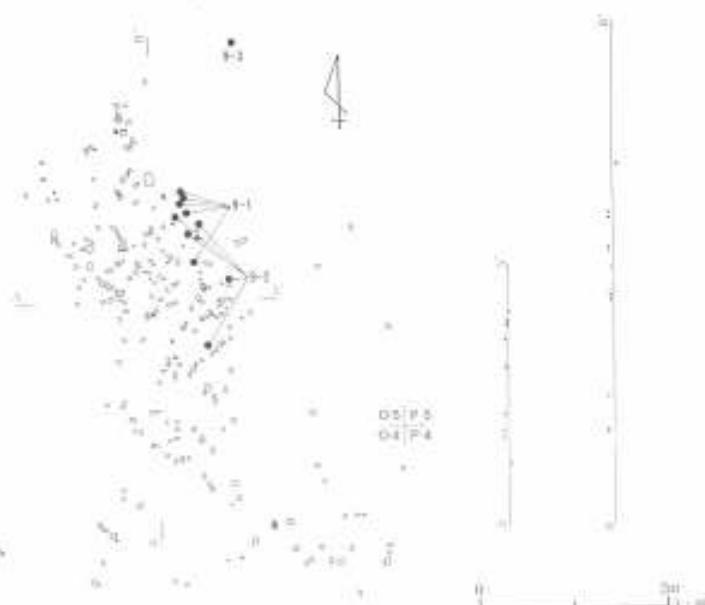
(1) 据立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（第6・8図）

- 1 高台径6.2cm、残存高2.8cmを計る土師器高台付杯。胎土は白色砂粒を多く含む。焼成はやや悪く、



第6図 1号掘立柱建物跡

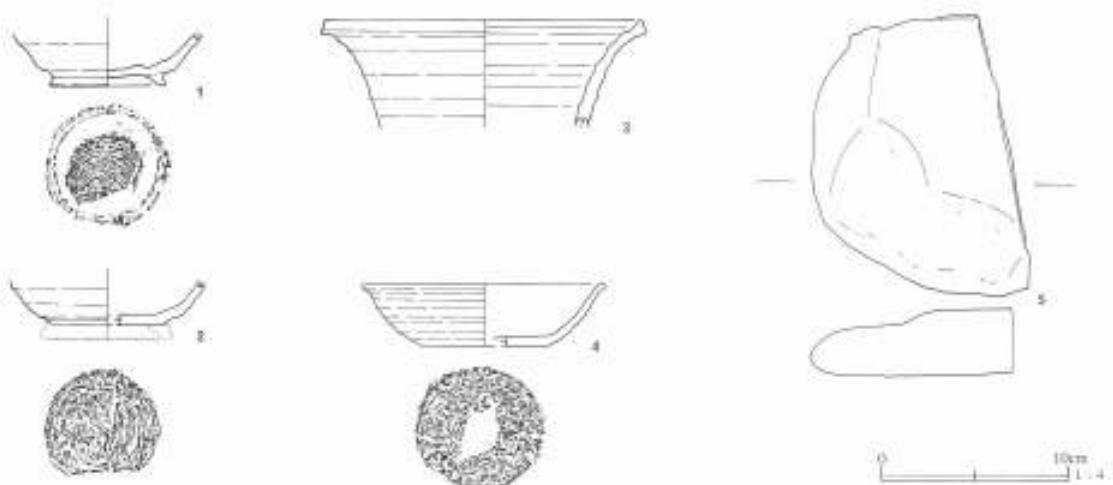


第7図 1号集石遺構

器面はざらついている。色調は黒褐色である。残存率は20%である。

2 底部径6cm、残存高2.3cmを計る土師器高台付壺。胎土は白色砂粒・雲母を含む。焼成はやや悪くざらついている。色調は赤褐色である。残存率は55%である。

3 口径16.7cm、残存高5.7cmを計る須



第8図 1号掘立柱建物跡出土遺物



第9図 1号集石遺構出土遺物

須恵器壺。胎土は砂粒を少量含む。焼成は良好で堅い。色調は灰白色である。

4 口径13cm、底径6.6cmを計る須恵器壺。胎土は白色砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は灰色である。残存率は70%である。底部は回転糸切り後、無調整である。

石器（第8図）

5 残存長14.9cm、最大厚5.2cmを計る自然石。材質は閃緑岩。平面図の裏面は磨れている。

1号集石遺構（第7・9図）

1号掘立柱建物跡の中央に位置し、建物跡の確認面から約30cm上の面で検出された。南北6.7m、東西4.6mの範囲で広がっていた。須恵器が出土した。

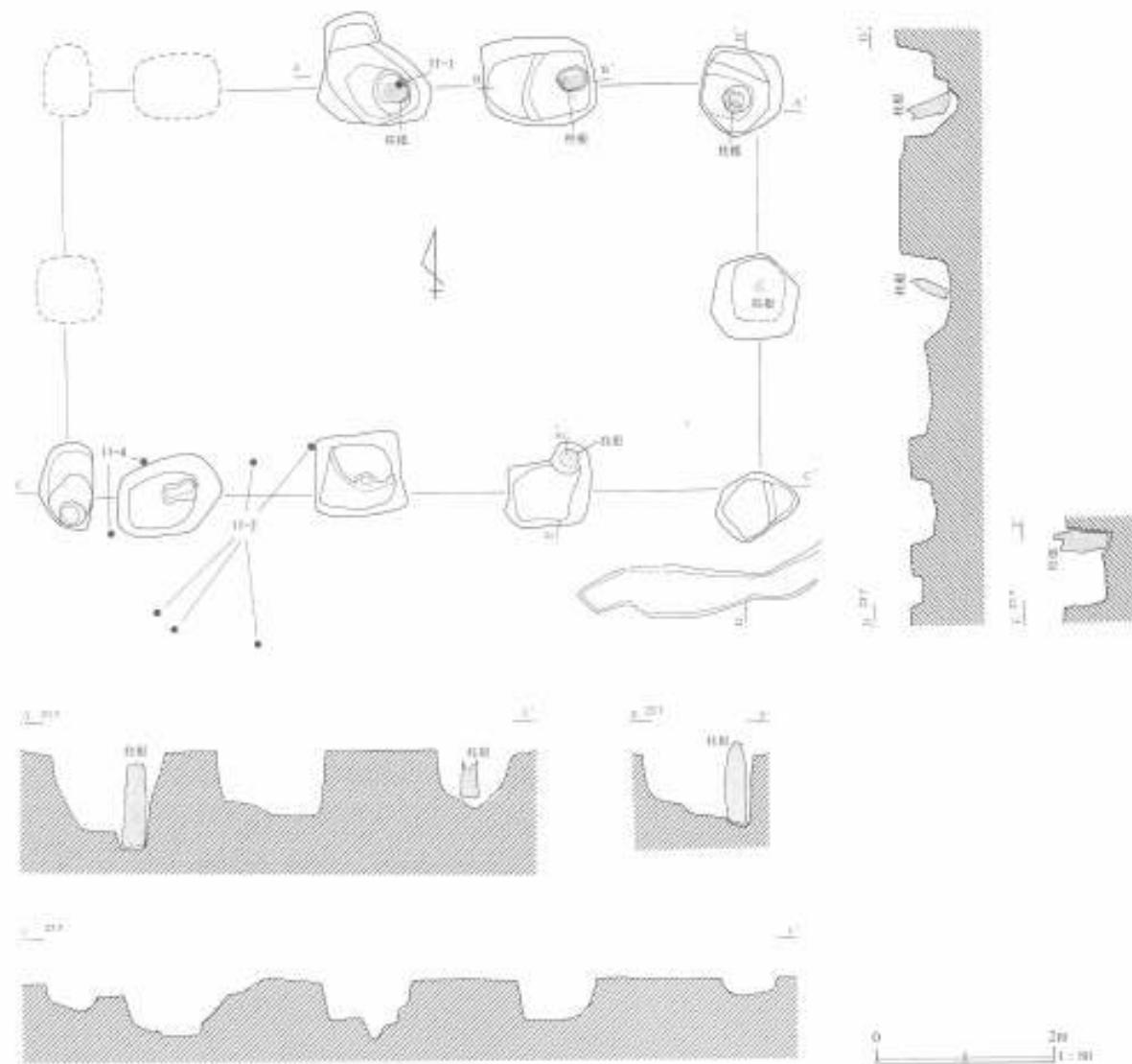
（出土遺物）

土器（第9図）

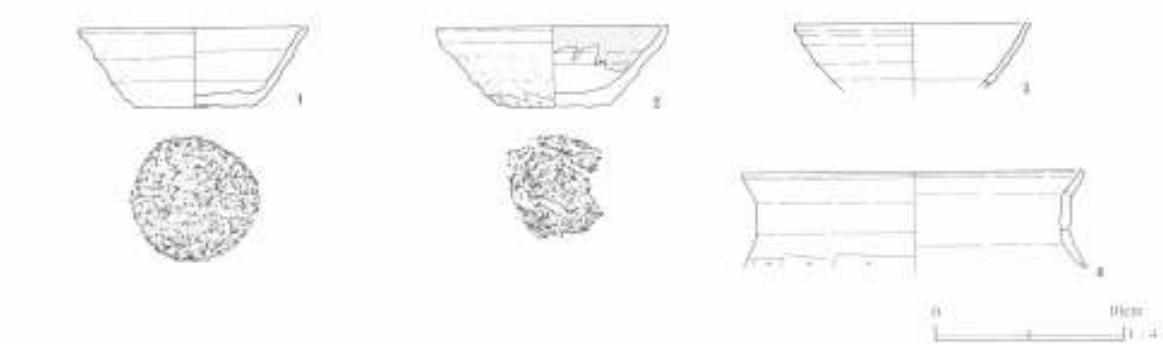
1 口径14.4cm、底径5.9cm、残存高5.5cmを計る須恵器高台付椀。胎土は白色砂粒を多く含み、黒色粒も含む。焼成は良好で、色調は灰色である。残存率は75%である。

2 口径12.8cm、底径2.7cm、器高3.5cmを計る須恵器壺。胎土は白色砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は灰色である。残存率60%である。底部は回転糸切り後、無調整である。

3 底径5.2cm、残存高2.1cmを計る須恵器壺。胎土は白色針状物質を含み、焼成は良好で、色調は灰色である。底部は回転糸切り後、無調整である。



第10図 2号掘立柱建物跡



第11図 2号掘立柱建物跡出土遺物

2号掘立柱建物跡（第10・11図）

P・Q-5・6グリッドから検出された。

規模は、4間×2間の側柱建物で、桁行7.65m、梁行4.5mで、東西に長い建物跡であった。西側の柱穴が検出されなかったが、面積は34.4m²であると推定される。主軸方位はN-90°-Eであった。

柱穴の平面形は、方形または梢円形で、径90cm～1.2m、深さ40cm～1.1mであった。

柱根は、5カ所で検出された。

（出土遺物）

土器（第11図）

1 口径12cm、底径6.6cm、器高4.2cmを計る須恵器壺。胎土は白色砂粒を多く含み、焼成は悪く、色調はやや赤味を帯びた灰色である。底部調整は手持ちへら削りである。残存率60%である。

2 口径12.4cm、底径6cm、器高4.1cmを計る土師器壺。胎土は白色砂粒・赤色粒を含み、焼成はふつうで、色調は淡褐色である。体部外面は指おさえ痕があり、底部周辺及び底面はへら削りで、内面には煤が付着している。残存率75%である。

3 口径12.4cm、残存高3.5cmを計る須恵器壺。胎土は白色針状物質・白色砂粒・赤色粒を含み、きめが細かく、焼成は良好である。色調は明褐色である。残存率は口縁の20%である。

4 口径18.2cm、残存高5.2cmを計る土師器甕。胎土は白色砂粒・雲母を含み、焼成は良好で、色調は外面は暗褐色、内面は淡褐色である。頸部は横位のへら削りである。

（2）住居跡

住居跡は、調査区の南側に1軒確認され、遺物の量も少量であった。

1号住居跡（第12・13図）

調査区の南側、Q・R-3グリッドで検出された。

住居跡の南側は、調査区域外であり検出できなかった。形態は方形と考えられるが、東壁は張出部が2カ所みられた。主軸方位はN-7°-Eであり、規模は東西方向（A-A'断面）で3.1m、深さ36cmであった。北側からカマドが検出され、柱穴は2カ所確認され、北側の柱穴には柱根がわずかに残存していた。

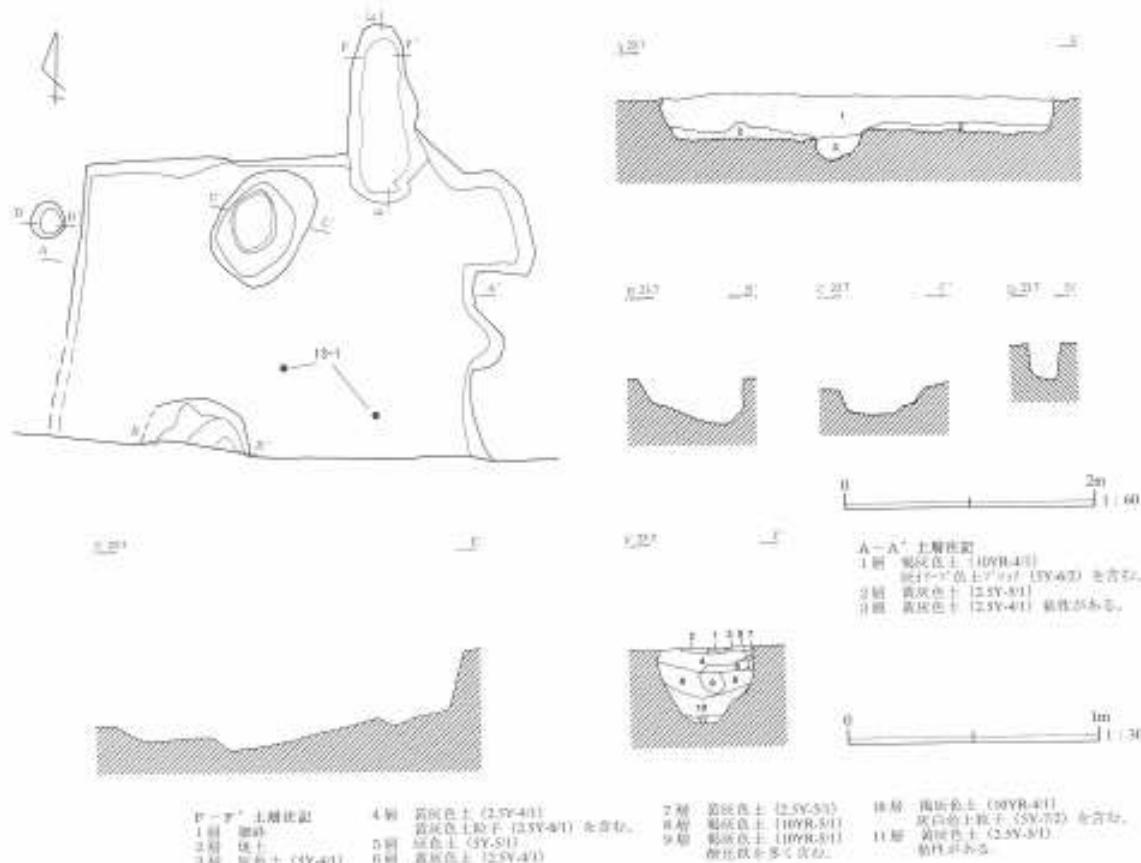
実測可能な遺物は、土師器2点であった。

（出土遺物）

土器（第13図）

1 口径11.4cm、底径7.3cm、器高2.1cmを計る土師器壺。胎土は黒色粒・雲母を含み、焼成は良好で、色調は淡褐色である。口縁は横なでされ、体部はへら削りされている。残存率は15%である。

2 底径7.6cm、残存高2.5cmを計る土師器台付甕の台部。胎土は白色砂粒・雲母を含み、焼成は良好で、色調は黒褐色である。外面は煤けていて、残存率は台部の80%である。



第12図 1号住居跡

(3) 土坑・ピット

土坑は、調査区の南側Q・R・S-3・4グリッドに集中してみられ、東側では2基だけ確認された。3～6号土坑は掘立柱建物跡の可能性があり、2号集石遺構はその建物と関連があるものとも考えられる。ピットは、調査区の西側でM-7グリッドで検出された。

1号土坑（第14図）

1号住居跡の北西に検出された。長方形を呈し、大きさは118×82cmで、深さ48cmであった。

2号土坑（第14図）

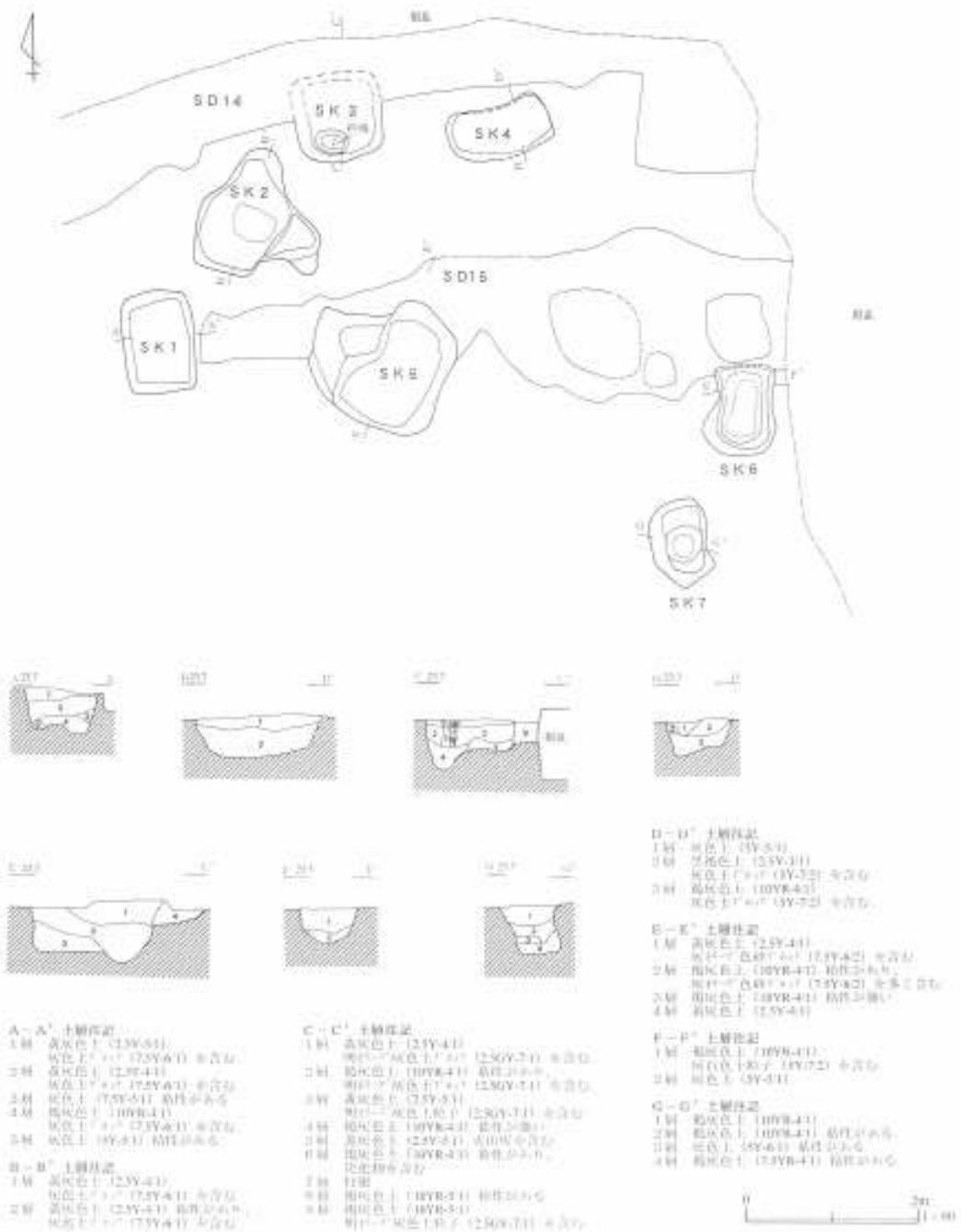
1号土坑の北西に検出された。楕円形に三角形の張出し部をもつ形を呈し、大きさは148×142cmで、深さは48cmであった。

3号土坑（第14図）

2号土坑の北西に検出された。方形を呈し、大きさは103×101cmで、深さ58cmであった。南側に柱根が残存していた。



第13図 1号住居跡出土遺物



第14図 1~7号土坑

4号土坑(第14図)

3号土坑の東側に検出された。長方形を呈し、大きさは119×76cmで、深さは40cmであった。

5号土坑(第14図)

1号土坑の東側に検出され、15号溝と重複しており、その溝を切っていた。長方形に三角形の張出部を西側にもつ形であった。大きさは162×154cmで、深さは70cmであった。

6号土坑(第14図)

5号土坑の東側に検出され、15号溝と重複しており、その溝を切っていた。長方形を呈しているが、

長辺が内側に屈曲していた。大きさは約100×64cmで、深さは40cmであった。

7号土坑（第14・17図）

6号土坑の南西に検出された。長方形を呈し、底の部分がさらに円形に掘られていた。大きさは98×64cmで、深さ54cmであった。実測可能な遺物は、覆土上部から1点の須恵器高台付壺（第17図2）が出土した。底径5.6cm、残存高3.1cmで、胎土は白色砂粒を多く含み、焼成はやや悪い。色調は灰色で部分的に淡褐色である。残存率は20%である。

8号土坑（第16図）

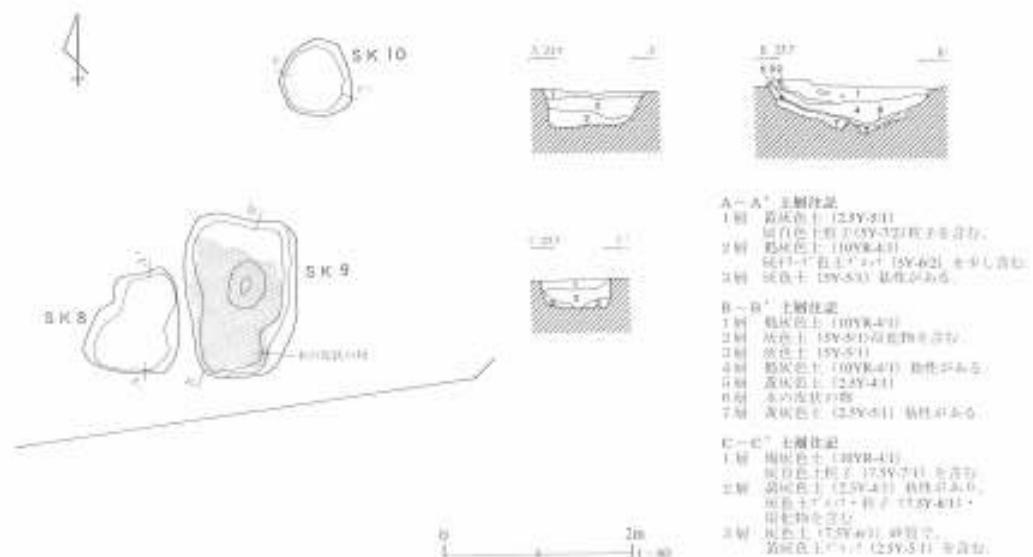
7号土坑の東側に検出された。不整形な台形を呈し、大きさは110×90cmで、深さは40cmであった。

9号土坑（第16・17図）

8号土坑の東側に接して検出された。長方形を呈するが、南辺の方が北辺より短く、大きさは170×118cmで、深さは50cmであった。底面には木の皮状の物が敷かれていた。実測可能な遺物は、土師器が2点出土した。土師器甕（第17図1）は、口径18.8cm、残存高6.6cmで、胎土は雲母・白色砂粒等細か



第15図 2号集石遺構



第16図 8~10号土坑



第17図 7・9号土坑出土遺物



第18図 11・12号土坑、1・2号ピット

い砂粒を含み、焼成は良好である。色調は淡褐色で、残存率は口縁の15%である。土師器壺(第17図3)は、口径12.5cm、底径10.2cm、器高3.4cmで、胎土は雲母等細かい砂粒を含む。焼成は良好で、色調は淡褐色であり、口縁内面に煤が付着している。体部外面はへら削りされ、残存率は40%である。

10号土坑(第16図)

9号土坑の北東に検出された。廟の丸い台形を呈し、大きさは80×74cmで、深さは30cmであった。

11号土坑(第18図)

調査区の東側のU-6グリッドで検出された。方形を呈し、大きさは58×52cmで、深さは32cmであった。柱根が残存していた。

12号土坑(第18図)

11号土坑の北側のU-8・9グリッドで検出された。台形を呈し、大きさは171×90cmで、深さは35cmであった。底部の東側は梢円形の掘込みがあった。

2号集石遺構(第15図)

4号土坑・14号溝と重複しており、それらの確認面より上層で検出された。大きさは長軸3.4×短軸2.74mで、南東部は梢円形状に石が集中していた。3・4・5・6号土坑は掘立柱建物跡の可能性があり、本遺構は、それと関連があると思われる。

1号ピット(第18図)

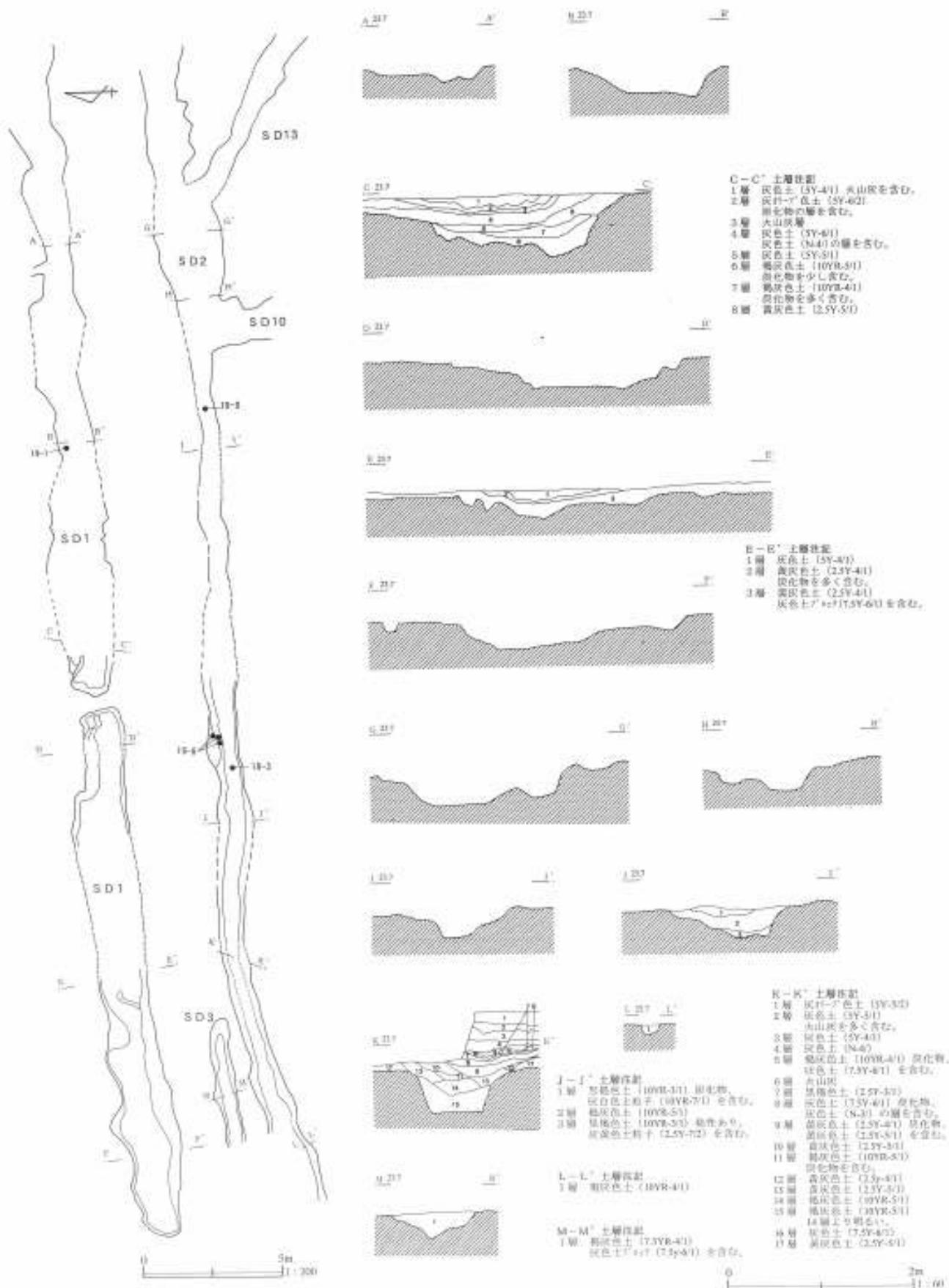
調査区の西側のM-7グリッドで検出された。ひょうたん形を呈し、北側の大きさは径45cm、南側の大きさは50×46cm、深さは10cmであった。

2号ピット(第18図)

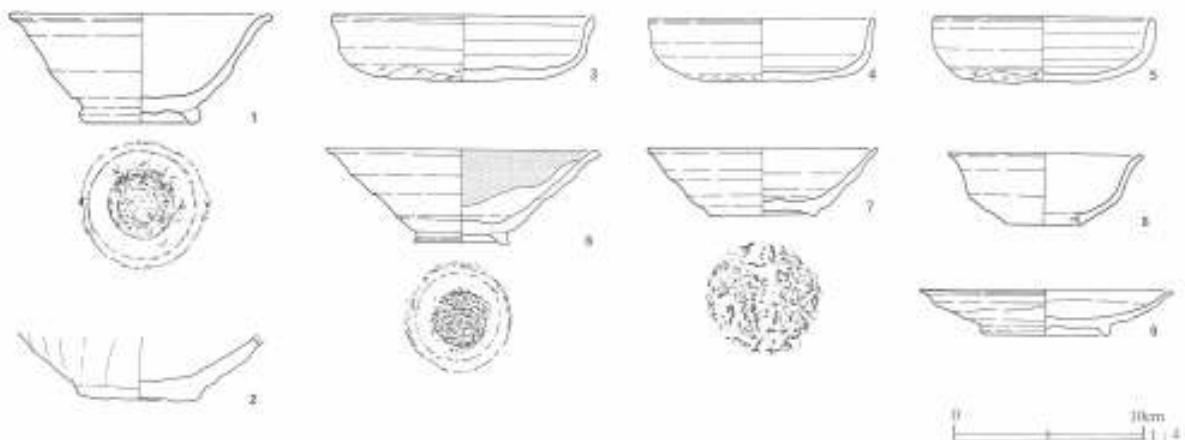
1号ピットの南側に接して検出された。廟丸方形を呈し、大きさは69×60cmで、深さは15cmであった。

(4) 溝

調査区の南側全域にわたって16条の溝が検出された。掘立柱建物跡を開拓するようにして出土したものが多く、建物跡に関連があるものと考えられる。



第19図 1～3号溝



第20図 1・2号溝出土遺物

1号溝（第19・20図）

調査区のほぼ中央を東西に走っており、幅253~123cmで、深さは67cmであった。検出された範囲の中央で途切れ、西側では5号溝と重複していた。

実測可能な遺物は、須恵器壺と土師器壺の2点であった。

（出土遺物）

土器（第20図-1・2）

1 口径13.8cm、底径6.4cm、器高5.8cmを計る須恵器高台付壺。胎土は雲母・白色砂粒を含み、焼成は悪く、色調は灰色だが大部分が黒色化している。残存率は60%である。

2 底径6.6cm、残存高3.7cmを計る土師器壺。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は淡褐色である。外面はへらなでされ、残存率は底部の35%である。

2号溝（第19・20図）

1号溝の南側を平行して走っていて、幅213~103cmで、深さは54cmであった。東側では10号溝と13号溝と重複していた。西側は途切れてしまい確認できなかった。

実測可能な遺物は、土師器・須恵器・灰釉陶器が7点であった。

（出土遺物）

土器（第20図-3~9）

3 口径13.6cm、底径9.2cm、器高3.5cmを計る土師器壺。胎土は雲母等細かい砂粒を含み、焼成は良好で、色調は淡褐色である。底部外面はへら削りされ、残存率は40%である。

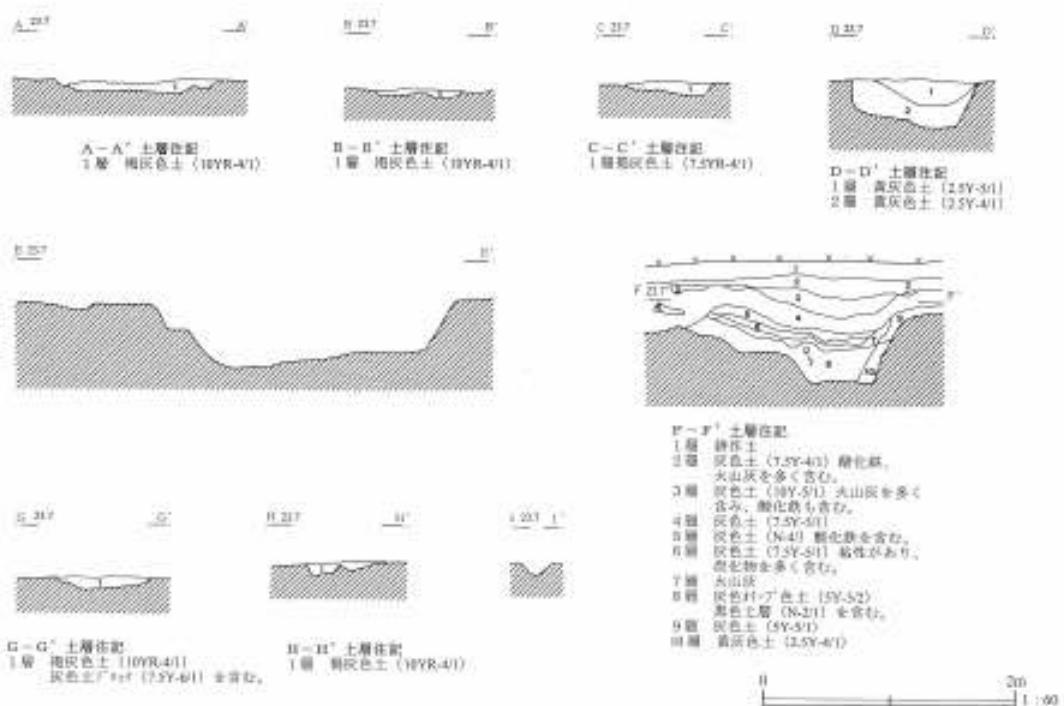
4 口径12cm、底径9.2cm、器高3.5cmを計る土師器壺。胎土は雲母・褐色粒子を含み、焼成は良好で、色調は淡褐色である。底部外面は暗い色であり、へら削りされ、残存率は80%である。

5 口径12cm、底径7.2cm、器高3.5cmを計る土師器壺。胎土は雲母・白色砂粒を含み、焼成は普通で、色調は淡褐色である。底部外面はへら削りされ、残存率は40%である。

6 口径14.2cm、底径5.3cm、器高5cmを計る須恵器高台付壺。胎土は白色砂粒等細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は灰色である。内面は煤けて黒い部分がある。残存率は90%である。



第21図 4～8号溝(1)



第22図 4～8号溝(2)

7 口径12.2cm、底径5.9cm、器高3.6cmを計る須恵器坏。胎土は白色粒子等細かい砂粒を含み、焼成は良好で、色調は淡灰色である。

8 口径10.3cm、底径4cm、器高3.8cmを計る須恵器坏。胎土は白色砂粒と少しの網雲母片岩粒を含み、焼成は悪く、色調は灰色だが大部分黒色化している。残存率は15%である。

9 口径13.4cm、底径6.6cm、器高2.3cmを計る灰釉陶器皿。胎土はきめ細かく、焼成は良好で、色調は白灰色である。底部は回転へら削りされ、残存率は30%である。

3号溝(第19図)

1号溝と2号溝の間に検出され、両溝に平行して走っていて、幅90～60cmで、深さは28cmであった。

4号溝(第21・22図)

調査区域の西側L-6・7グリッドを南北方向に走っていて、幅120～94cmで、深さは10cmであった。南側で6号溝と重複していた。北側は、途切れてしまい確認されなかった。

5号溝(第21・22図)

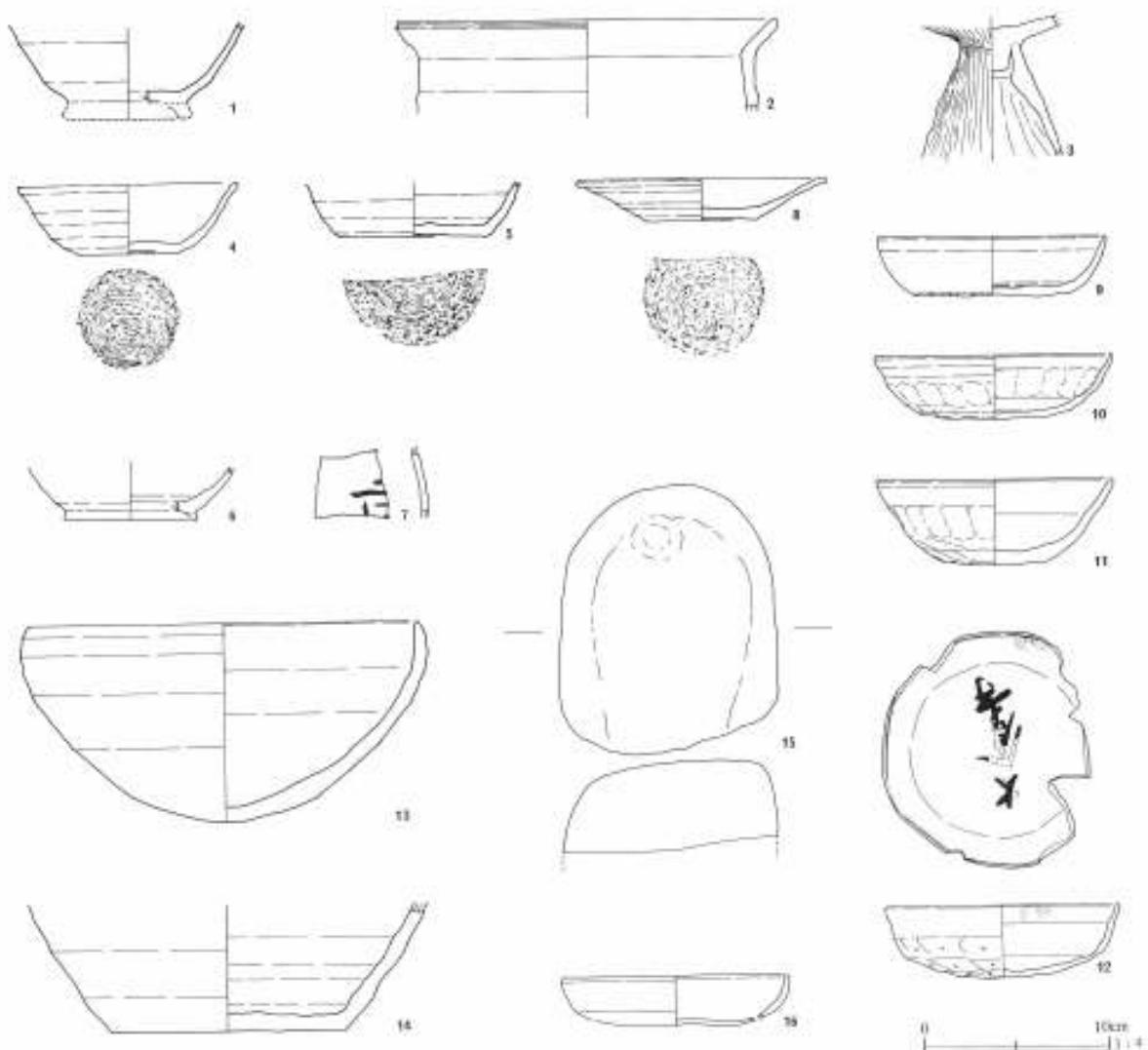
4号溝の東側で、1号溝の西端で確認され、南北方向に走っていた。幅112～64cmで、深さ10cmであった。北側は途切れてしまい確認されなかった。

6号溝(第21・22・23図)

調査区の西側で検出され、K-6グリッドから東へ走り、M-6グリッドで南へ走っていた。幅280～70cmで、深さ54cmであった。実測可能な遺物は土師器高台付坏(第23図1)で、底径6.6cm、残存高4.3cmである。胎土は褐色粒子を多く含み、焼成は悪く、色調は淡褐色である。残存率は20%である。

7号溝(第21・22図)

6号溝と重複して検出され、南北方向に走っていた。幅76cm、深さ10cmであった。



第23図 6・10・12・13号溝出土遺物

8号溝（第21・22図）

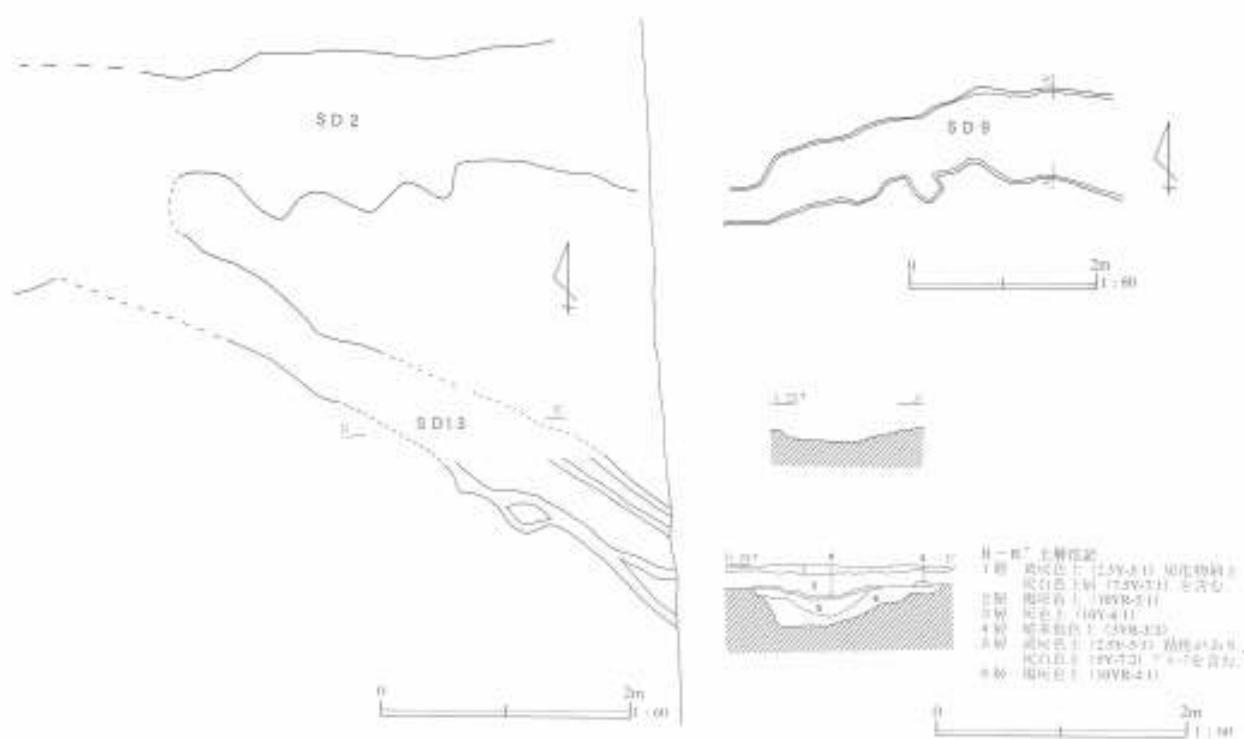
6号溝の東側で検出され、6号溝に平行して走っていて、北側には長方形の掘込みがみられた。幅22cm、深さは8cmで、長方形の掘込み部分の長軸幅は64cmであった。

9号溝（第24図）

2号掘立柱建物跡の西側で検出され、東西方向に走っていた。幅106~38cmで、深さは7cmであった。

10号溝（第23・25・26図）

T-6グリッドで2号溝と重複しており、南へ走り、T-5グリッドで西へ走っていて、2号掘立柱建物跡で途切れていた。幅335~88cmで、深さ46cmであった。実測可能な遺物は覆土上部で出土し、土師器2点であった。土師器甕（第23図2）は、胎土は白色砂粒を多く含み、焼成はやや悪く、色調は暗褐色である。残存率は口縁の15%である。土師器高杯（第23図3）は、胎土は白色砂粒等砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は淡褐色だが外面は赤彩されて赤い。



第24図 9・13号溝

11号溝（第25・26図）

T-6グリッドで検出され、10号溝に平行して南北に走っていて、幅60cm、深さ6cmであった。

12号溝（第23・25・26図）

10号溝の南側を東西方向に走っていて、T-4グリッドで南北方向に走っていた。幅150~40cm、深さ52cmであった。実測可能な遺物は土師器・須恵器・石器で計13点であった。

（出土遺物）

土器（第23図-4~15）

4 口径12.1cm、底径5.5cm、器高3.6cmを計る須恵器壺。胎土は白色針状物質が多く含み、白色砂粒も含む。焼成は良好で、色調は灰色で、口縁部は黒い。底部は回転糸切りで、残存率は75%である。

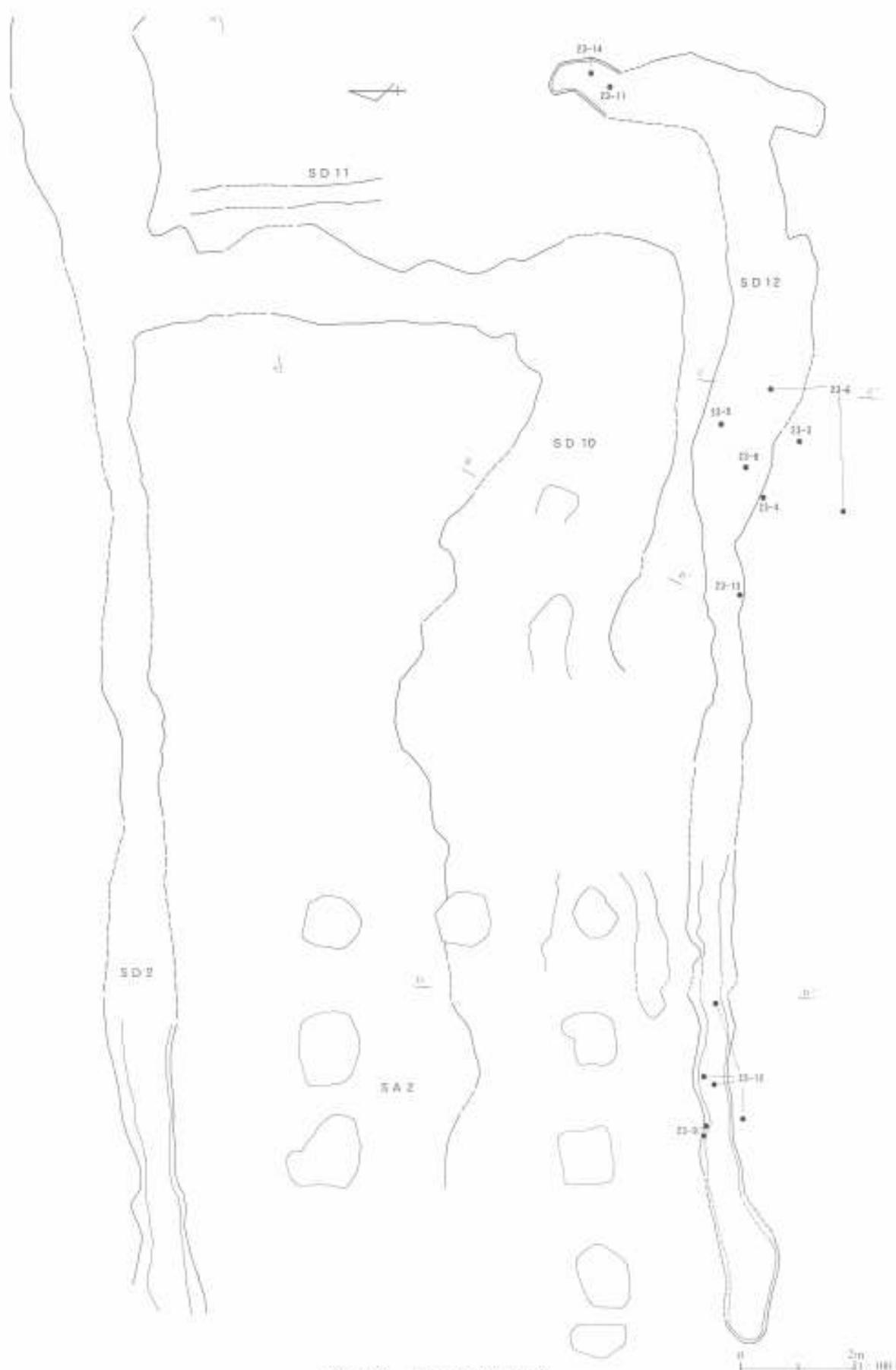
5 底径8.8cm、残存高2.8cmを計る須恵器壺。胎土は白色針状物質を含み、きめが細かく、焼成は良好で、色調は灰白色である。底部は回転糸切りの後、周辺のみ回転へら削りされている。残存率は底部の40%である。

6 底径7cm、残存高3cmを計る須恵器高台付壺。胎土は白色砂粒・褐色粒を含み、焼成はやや悪く、色調は褐色で内面は煤けて黒い。残存率は底部の15%である。

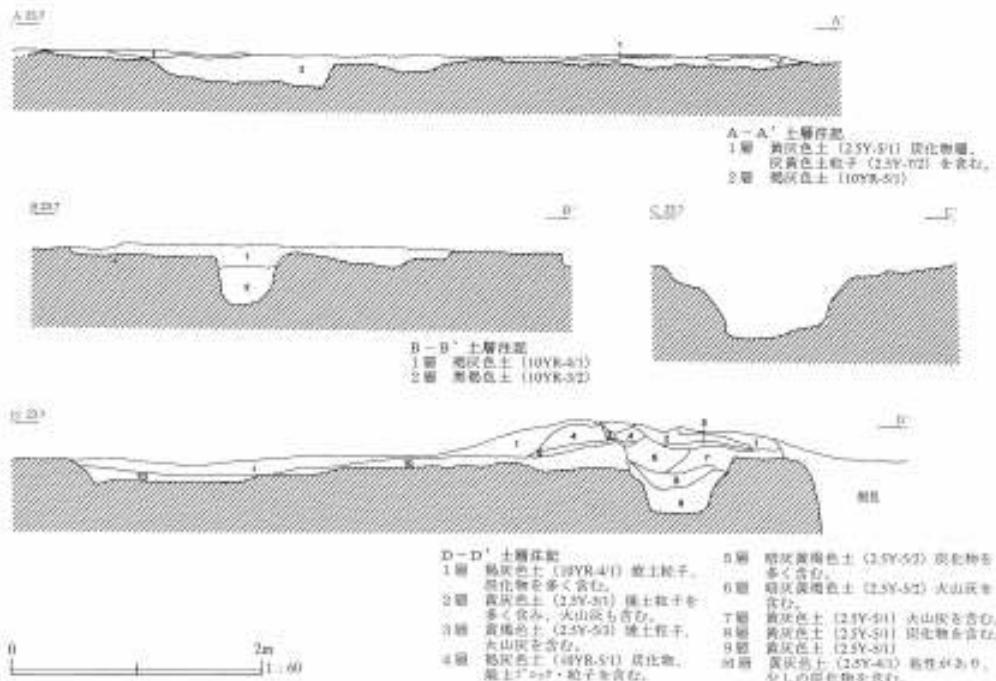
7 須恵器壺の墨書き土器である。胎土は白色砂粒・雲母を含み、焼成は良好で、色調は灰色である。

8 口径13.8cm、底径6.4cm、器高2.1cmを計る須恵器皿。胎土は白色砂粒等砂粒を多く含み、焼成は普通で、色調は灰色で内面は煤けて黒い。底部は回転糸切りで、残存率は60%である。

9 口径12.2cm、底径8.5cm、器高3.2cmを計る土師器壺。胎土は白色砂粒・黑色粒・雲母を含み、焼成はやや悪く、色調は淡褐色だが内面は煤けて黒い所がある。底部外面はへら削りされている。残存率は70%である。



第25図 10~12号溝 (1)



第26図 10～12号溝 (2)

10 口径13cm、底径8.4cm、器高3.5cmを計る土師器壺。胎土は細かい砂粒を多く含み、焼成はやや悪く、色調は淡褐色である。底部外面はへら削りされている。残存率は45%である。

11 口径は12.8cm、底径5.7cm、器高4.7cmを計る土師器壺。胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや悪く、色調は淡黄褐色で、内面は煤けて黒い。底部外面はへら削りされ、残存率は90%である。

12 口径12.7cm、底径10.5cm、器高4cmを計る土師器壺。胎土は白色砂粒・雲母を含み、焼成はやや良く、色調は褐色である。体部はへら削り、内面に「大倉寺」の墨書がある。残存率は70%である。

13 口径20.9cm、器高10.8cmを計る須恵器鉄鉢。胎土は白色砂粒を含み、焼成はやや悪く、色調は暗灰色で、外表面は淡褐色である。残存率は20%である。

14 底径12.8cm、残存高6.9cmを計る須恵器壺。胎土は白色砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は暗灰色である。残存率は底部の50%である。

石器（第23図）

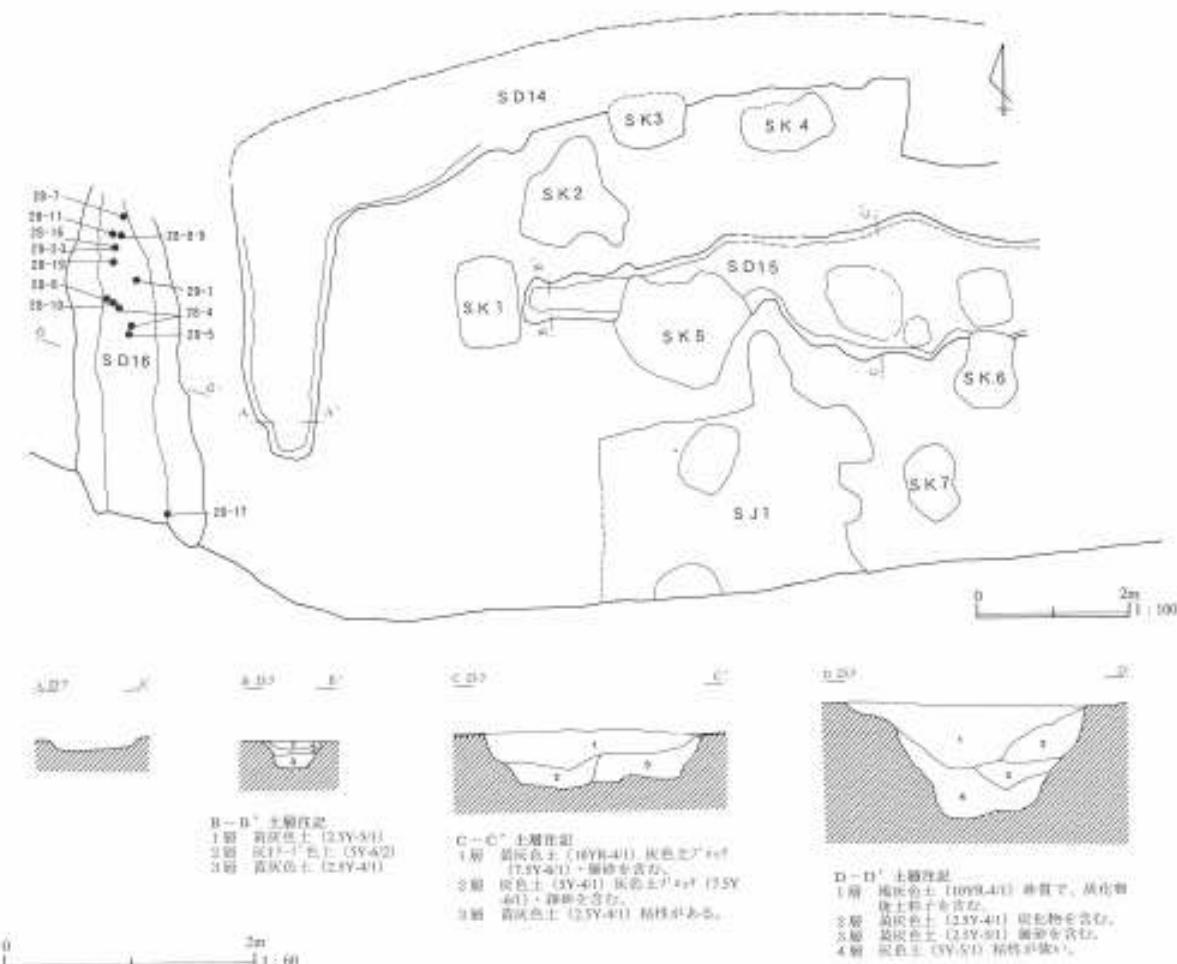
15 残存長14.5cm、最大幅11.9cmを計る石。材質は閃緑岩。平面図の表面は磨れていて、煤けて黒い。

13号溝（第23・24図）

調査区の西側で、2号溝と重複しており主軸は北西から南東方向であった。幅88~40cm、深さ31cmであった。実測可能な遺物は土師器壺（第23図16）で、口径12.2cm、底径10.9cm、器高2.8cmである。胎土は細かい砂粒を含み、焼成は悪く、色調は明褐色で、残存率は95%である。

14号溝（第27・28図）

調査区の南側で、3号土坑と重複して検出され、Q・R-4グリッドでは東西方向に走っていたが、P-4グリッドでは南北方向に走っていた。北側と東側は擾乱を受けている。幅78cm、深さ8cmであった。実測可能な遺物は、須恵器1点・土師器2点であった。須恵器壺（第28図1）は、口径12.2cm、底径6.4cm、器高3.5cmで、胎土は白色針状物質を含み、焼成は良好である。色調は灰色で、底部は回転系



第27図 14～16号溝

切りで、残存率は60%である。土師器壺（第28図2）は、口径13.8cm、底径11cm、器高2.5cmで、胎土は雲母と細かい砂粒を含み、焼成は良好、色調は淡褐色である。残存率は40%である。土師器壺（第28図3）は、口径12.6cm、底径10cmで、胎土は雲母と細かい砂粒を含む。焼成は良好で、色調は黒褐色であり、内外面煤けている。残存率は20%である。

15号溝（第27図）

14号溝の南側に検出され、東西方向に走っていて、5・6号土坑と重複していた。幅は190～41cmで、深さは44～22cmであった。

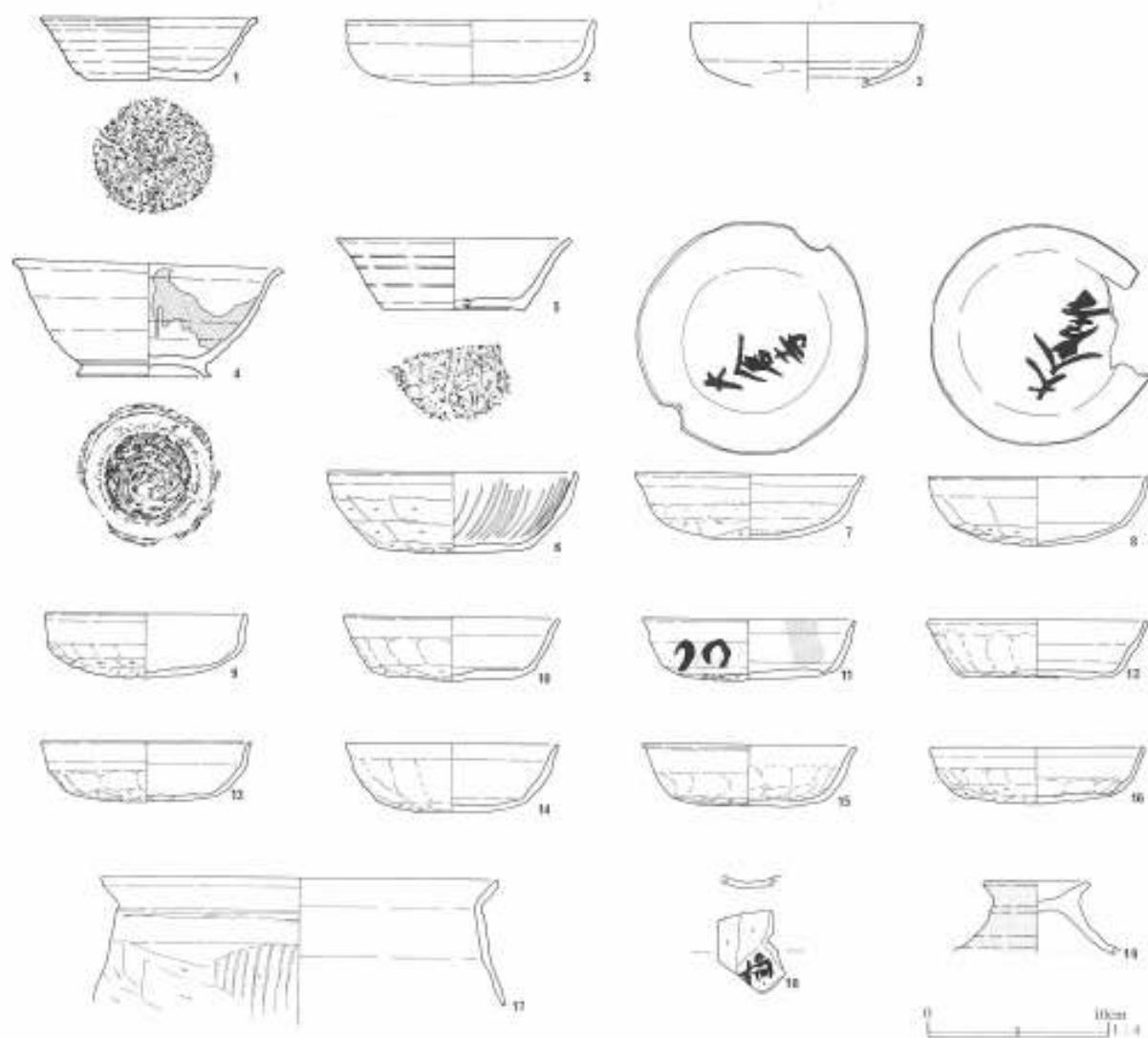
16号溝（第27・28・29図）

14号溝の西側に検出され、南北方向に走っていて、幅190cm、深さ94cmであった。実測可能な遺物は19点であった。

（出土遺物）

土器（第28図）

4 口径15cm、底径7cm、器高6.5cmを計る須恵器高台付碗。胎土は白色砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は灰色である。内面に煤が付着していて、残存率は85%である。



第28図 14・16号溝出土遺物

- 5 口径12.8cm、底径7.6cm、器高4cmを計る須恵器坏。胎土は白色砂粒・雲母を含み、焼成はやや悪く、色調は淡灰色である。残存率は30%である。
- 6 口径13.8cm、底径9cm、器高4.5cmを計る土師器坏。胎土は白色砂粒・雲母を含み、焼成は良好で、色調は淡褐色である。体部外面はへら削りされ、内面に暗文があり、残存率は70%である。
- 7 口径12.4cm、底径10cm、器高3.6cmを計る土師器坏。胎土は雲母等細かい砂粒を含み、焼成は良好で、色調は淡褐色である。底部外面はへら削り、内面に「大倉寺」の墨書がある。残存率は90%である。
- 8 口径12cm、底径9.7cm、器高3.9cmを計る土師器坏。胎土は雲母等細かい砂粒を含み、焼成は良好で、色調は淡褐色である。体部外面はへら削りで、内面に「大倉寺」の墨書がある。残存率は80%である。
- 9 口径13.6cm、底径10.1cm、器高3.6cmを計る土師器坏。胎土は雲母等細かい砂粒を含み、焼成はやや良く、色調は淡褐色で、底部外面はへら削りされている。残存率は95%である。
- 10 口径11.8cm、底径9.4cm、器高4.6cmを計る土師器坏。胎土は雲母等細かい砂粒を含み、焼成はやや良く、色調は淡褐色で、底部外面はへら削りされている。残存率は80%である。

- 11 口径11.8cm、底径8.5cm、器高3.6cmを計る土師器坏。胎土は雲母等細かい砂粒を含み、焼成はやや良好、色調は淡褐色である。残存率は95%である。体部外面には墨書があり、内面は煤が付着している。
- 12 口径12cm、底径9cm、器高3.1cmを計る土師器坏。胎土は雲母等細かい砂粒を含み、焼成は良好で、色調は淡褐色で、内面は黒ずんでいる。底部は平底で、へら削りされている。残存率は40%である。
- 13 口径11.6cm、底径8cm、器高3.3cmを計る土師器坏。胎土は雲母等細かい砂粒を含み、焼成は良好で、色調は淡褐色である。底部はへら削りされていて、残存率は50%である。
- 14 口径11.6cm、底径8.4cm、器高4.8cmを計る土師器坏。胎土は雲母等細かい砂粒を含み、焼成は良好で、色調は淡褐色である。底部はへら削りされていて、残存率は80%である。
- 15 口径11.6cm、底径8.3cm、器高3.4cmを計る土師器坏。胎土は雲母等細かい砂粒を含み、焼成は良好で、色調は淡褐色である。底部はへら削りされていて、残存率は60%である。
- 16 口径13.8cm、底径9.6cm、器高3.7cmを計る土師器坏。胎土は雲母等細かい砂粒を含み、焼成は良好で、色調は淡褐色である。底部はへら削りされていて、残存率は90%である。
- 17 口径22cm、残存高7cmを計る土師器壺。胎土は雲母・褐色粒等細かい砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面は暗褐色、内面は淡褐色である。頭部は横位にへら削りされていて、残存率は口縁の15%である。
- 18 「槁」という墨書がある土師器坏。胎土は雲母等細かい砂粒を含み、焼成は良好で、色調は淡褐色である。
- 19 残存高4.2cmを計る土師器台付壺。胎土は雲母等細かい砂粒を含み、焼成は良好で、色調は淡褐色だが、外面は漆が塗られていて黒褐色である。上部は故意に欠かれて整形されている。残存率は台部の70%である。

木器等（第29図）

- 長さ20.9cm、幅6.3cm、厚さ2.3cmを計る尖頭棒。角材の先端を削り尖らせている。
- 長さ17.5cm、幅1.5cm、厚さ0.9cmを計る削材。
- 長さ2.8cm、幅2.6cmを計る桃の種子。残存率は50%である。

（5）井戸跡

調査区の北西部に1基検出されただけであった。掘込みの浅いものであった。

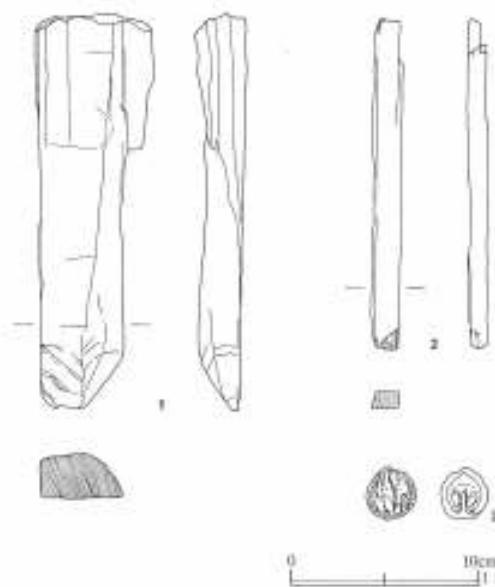
1号井戸跡（第30図）

調査区の北西部のO-N-9グリッドから検出され、長方形を呈し、長軸が東西方向を示していた。大きさは444×253cmで、深さは66cmであった。

（6）遺構外遺物

土器（第31図）

- 口径11.6cm、底径7cm、器高3.5cmを計る須恵器坏。胎土は白色砂粒等細かい砂粒を含み、焼成は良好で、色調は灰色である。底部は回転糸切りで、残存率は40%である。T-5グリッド出土。
- 口径12cm、底径7cm、器高3.3cmを計る須恵器坏。胎土は白色針状物質や細かい砂粒を含み、焼成は良好で、色調は灰色である。底部は回転糸切りで、残存率は60%である。Q-5グリッド出土。



第29図 16号溝出土遺物

3 口径11.9cm、底径4.4cm、器高3.4cmを計る須恵器壺。胎土は白色砂粒等細かい砂粒を含み、焼成は悪く、色調は黒灰色である。底部は回転糸切りで、残存率は60%である。O-3グリッド出土。

4 口径12cm、底径5.4cm、器高4.1cmを計る土師器壺。胎土は細かい砂粒を含み、焼成は悪く、色調は淡黄褐色である。内面は煤が付着しており、残存率は35%である。P-3グリッド出土。

5 底径4.8cm、残存高2.7cmを計る土師器壺。胎土は細かい砂粒を含み、焼成は悪く、色調は暗褐色である。外面は漆が、内面は煤がみられ、底部は回転糸切りで、残存率は30%である。O-5グリッド出土。

6 底径6cm、残存高3.1cmを計る須恵器高台付壺。胎土は白色砂粒等細かい砂粒を含み、焼成は悪く、色調は外面は灰白色、内面は暗灰色である。残存率は30%である。P-5グリッド出土。

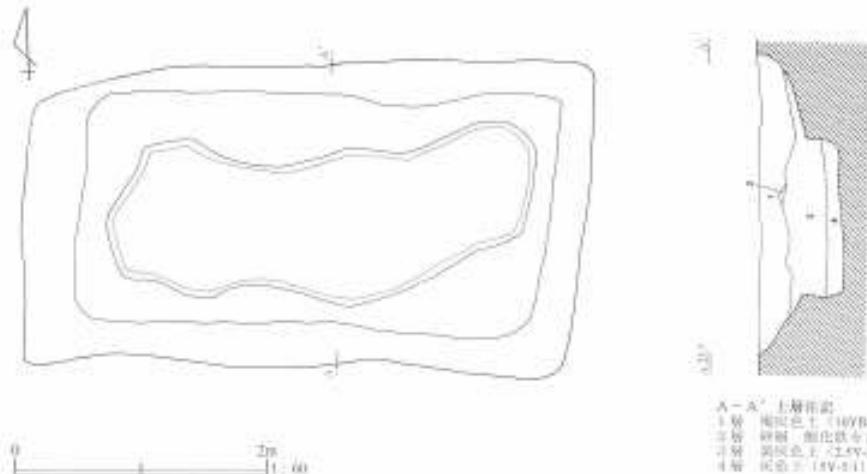
7 底径7cm、残存高3.3cmを計る土師器高台付壺。胎土は細かい砂粒を少し含み、焼成は悪く、色調は淡黄褐色である。内面は煤の付着がみられ、残存率は30%である。Q-6グリッド出土。

8 底径6.6cm、残存高3.5cmを計る須恵器高台付壺。胎土は白色砂粒等細かい砂粒を含み、焼成は良好で、色調は灰色である。残存率は20%である。N-5グリッド出土。

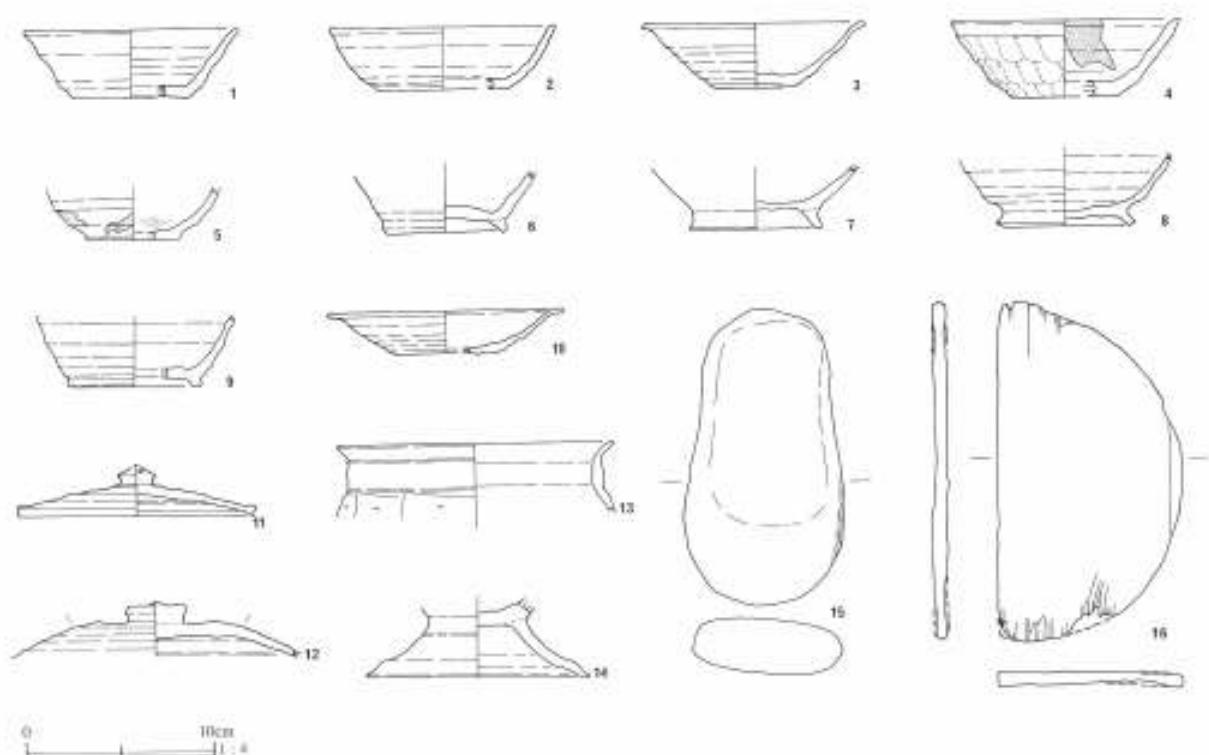
9 底径6.4cm、残存高3.7cmを計る土師器高台付壺。胎土は白色砂粒・褐色粒・雲母等細かい砂粒を含み、焼成は悪く、色調は淡黄褐色である。残存率は20%である。O-3グリッド出土。

10 口径12.6cm、底径5.2cm、器高2.2cmを計る須恵器皿。胎土は白色砂粒等細かい砂粒を含み、焼成は悪く、色調は灰白色である。底部は回転糸切りで、残存率は45%である。O-5グリッド出土。

11 口径12.3cm、器高2.5cmを計る須恵器蓋。胎土は細かい砂粒を少し含み、焼成は良好で、色調は灰白色である。残存率は25%である。O-6、P-3、R-5グリッド、16号溝出土。



第30図 1号井戸跡



第31図 遺構外出土遺物

12 残存高3.1cmを計る須恵器蓋。胎土は白色針状物質・白色砂粒を含み、焼成は良好で、色調は灰色である。天井部は回転へら削りされていて、残存率は30%である。P-6グリッド出土。

13 口径14.6cm、残存高3.8cmを計る土師器甕。胎土は雲母・褐色粒等細かい砂粒を含み、焼成は普通で、色調は褐色である。残存率は口縁部の30%である。S-4グリッド出土。

14 底径11.8cm、残存高4.3cmを計る土師器台付甕。胎土は雲母等細かい砂粒を含み、焼成は良好で、色調は淡褐色である。残存率は台部の20%である。T-3・4グリッド出土。

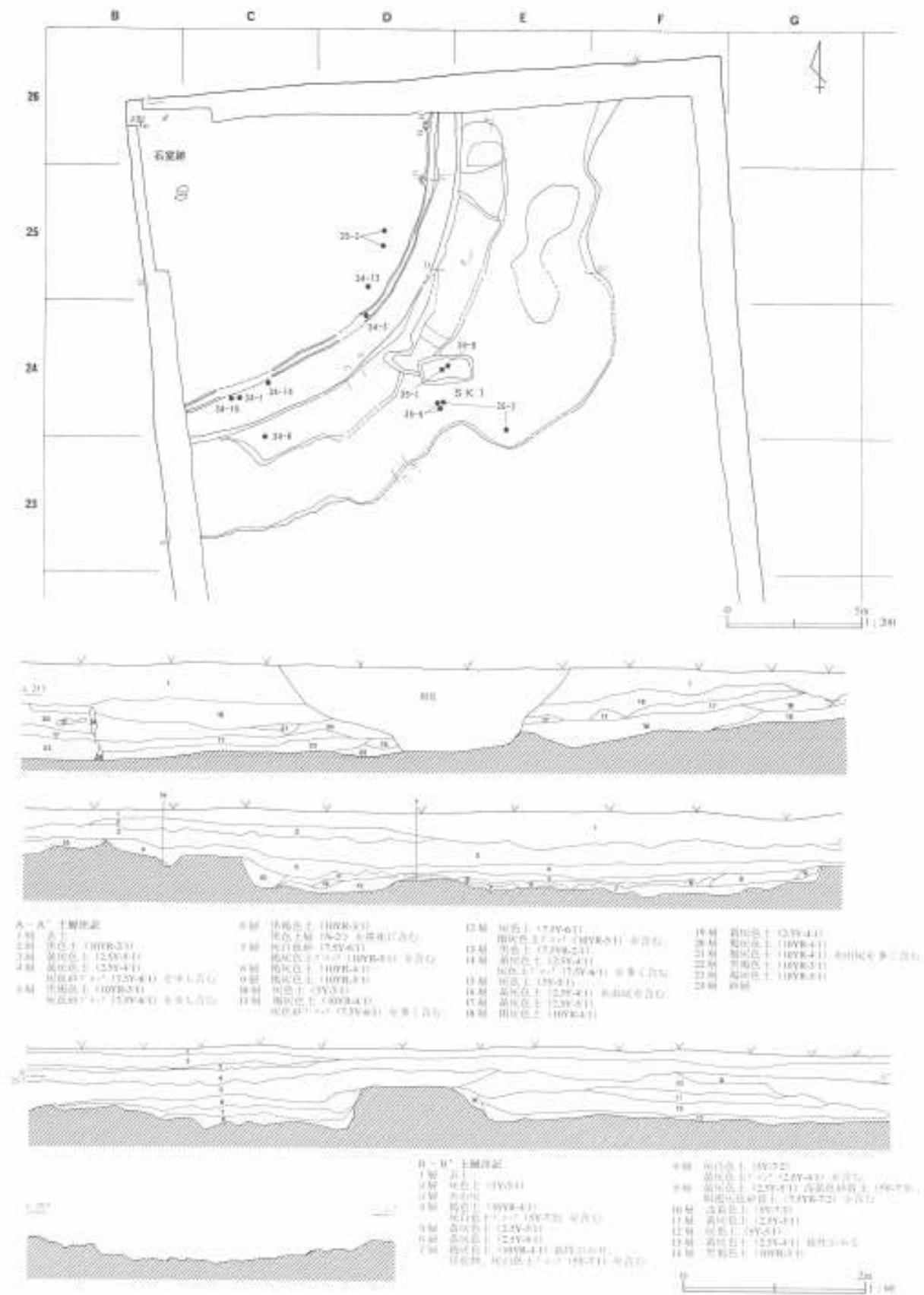
石器（第31図）

15 長さ15.9cm、最大幅8.5cm、厚さ3.1cmを計る磨石。材質は安山岩。表面は磨れている。Q-5グリッド出土。

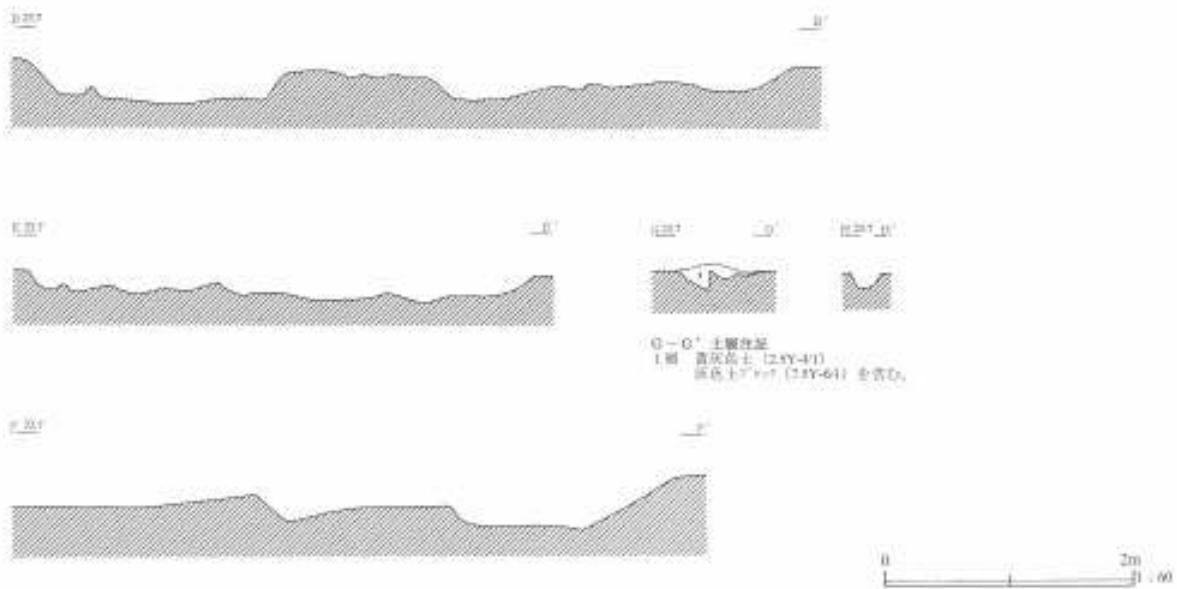
木器（第31図）

16 直径18cm、厚さ0.8cmを計る曲物。R-4グリッド出土。

V 女塚4号墳



第32図 女塚4号墳全測図(1)



第33図 女塚4号墳全測図（2）

1 遺跡の概観

女塚4号墳は、女塚遺跡の北西70mに位置する。標高約24mで、北西方向から利根川、南西方向から荒川の両河川の乱流によって形成された冲積扇状地の末端に立地している。

今回の発掘によって調査した部分は、昭和56年度に調査した部分の南側にあたり、検出された遺構は周溝及び石室跡・土坑1基であった。

2 遺構と遺物

（1）周溝と石室跡（第32・33図）

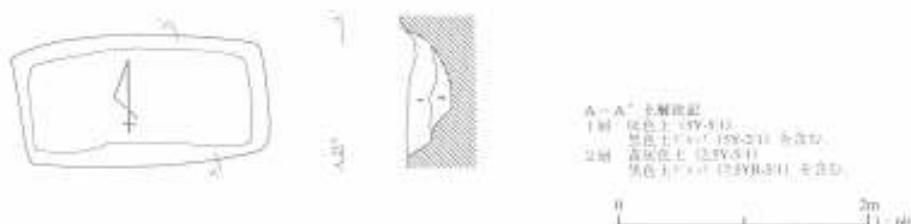
周溝は、幅7.4～3.9m、深さ49cmを計り、墳丘側は急に、外側はゆるやかに傾斜していた。墳丘側は9.6×2mの長方形の落ち込みがあり、外側は、南東への膨らみがみられた。また、墳丘側には幅40～15cm、深さ12cmの細い溝が周溝と同心円上に検出され、北側には小ピットが2基あった。

石室跡は、前回の調査で長軸3.2m、短軸1.6～1.3mの舟形磚椁と確認されていたが、その調査の残りと考えられる川原石が9点出土した。

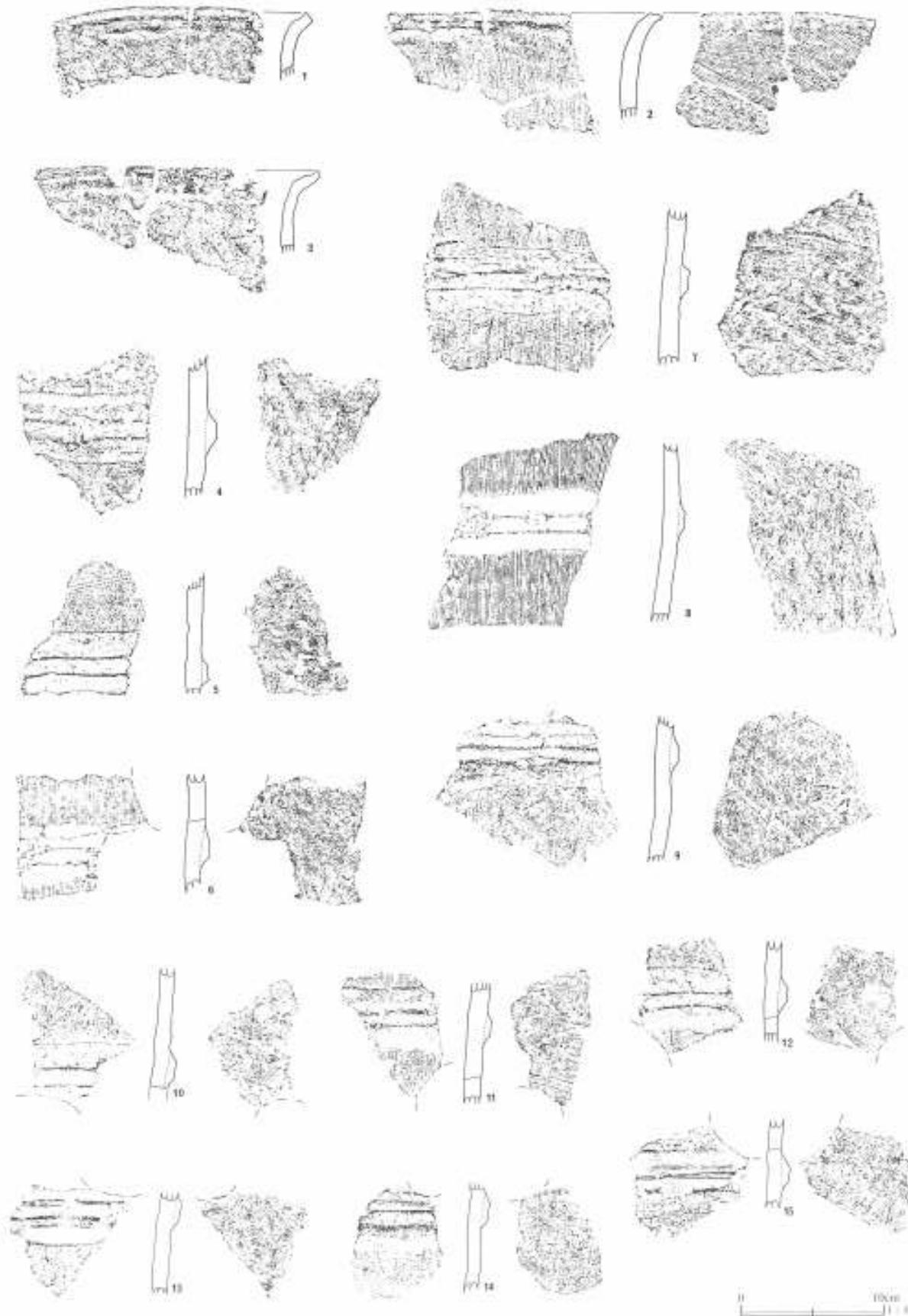
（2）土坑

1号土坑（第34図）

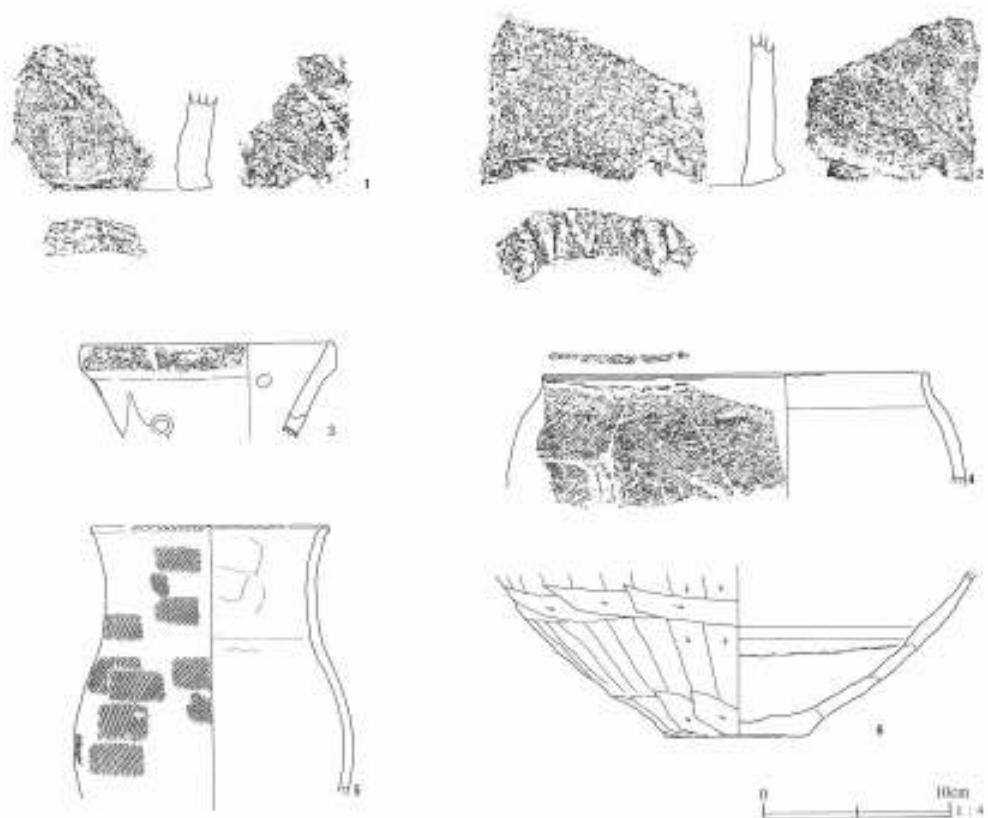
D・E-24グリッドで検出され、周溝と重複していた。長方形を呈し、大きさは196×103cmで、深さ40cmであった。



第34図 1号土坑



第35図 女塚4号墳出土遺物（1）



第36図 女塚4号墳出土遺物（2）

（3）出土遺物

円筒埴輪（第35・36図）

- 35-1 口縁部であり、胎土は白色砂粒・褐色粒等の砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は淡褐色である。
- 35-2 口縁部であり、胎土は白色砂粒・褐色粒・雲母等の砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は暗淡褐色である。
- 35-3 口縁部であり、胎土は白色砂粒・褐色粒・雲母等の砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は淡褐色である。
- 35-4 脇部であり、胎土は白色砂粒・褐色粒等の砂粒を多く含み、焼成はやや悪く、色調は淡褐色である。凸帯は断面が「M」字状を呈する。
- 35-5 脇部であり、胎土は白色砂粒・褐色粒等の砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は淡褐色である。凸帯は断面が「M」字状を呈する。
- 35-6 脇部であり、胎土は白色砂粒・褐色粒等の砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は淡褐色で、黒斑がある。凸帯は断面が「M」字状を呈し、透孔は円形である。
- 35-7 脇部であり、胎土は白色砂粒・褐色粒等の砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は淡褐色で、黒斑がある。凸帯は断面が「M」字状を呈する。
- 35-8 脇部であり、胎土は白色砂粒・褐色粒等の砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は淡褐色であ

る。凸帯は断面が「M」字状を呈する。

35-9 胎部であり、胎土は白色砂粒・褐色粒等の砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は淡褐色である。凸帯は断面が「M」字状を呈する。

35-10 胎部であり、胎土は白色砂粒・褐色粒・雲母等の砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は淡褐色である。凸帯は断面が「M」字状を呈し、透孔は円形である。

35-11 胎部であり、胎土は白色砂粒・褐色粒・雲母等の砂粒を多く含み、焼成はやや悪く、色調は淡褐色である。凸帯は断面が「M」字状を呈し、透孔は円形である。

35-12 胎部であり、胎土は白色砂粒・褐色粒・雲母等の砂粒を多く含み、焼成はやや悪く、色調は淡黄褐色である。凸帯は断面が「M」字状を呈し、透孔は円形である。

35-13 胎部であり、胎土は白色砂粒・褐色粒・雲母等の砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は淡褐色である。凸帯は断面が「M」字状を呈し、透孔は円形である。

35-14 胎部であり、胎土は白色砂粒・褐色粒・雲母等の砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は外面は淡褐色、内面は灰色である。外面は赤彩されている。凸帯は断面が「M」字状を呈し、透孔は円形である。

35-15 胎部であり、胎土は白色砂粒・褐色粒等の砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は外面は淡褐色で、内面は灰色である。凸帯は断面が「M」字状を呈し、透孔は円形である。

36-1 底部であり、胎土は白色砂粒等の砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は灰色である。

36-2 底部であり、胎土は白色砂粒・褐色粒・雲母等の砂粒を多く含み、焼成はやや悪く、色調は淡褐色である。

土器（第36図）

3 口径13.4cm、残存高5.1cmを計る弥生式土器壺。胎土は白色砂粒等細かい砂粒を含み、焼成は良好で、色調は灰色・淡黄褐色である。複合口縁であり、複合部に縄文が施文されていて、透孔が2個みられる。残存率は、口縁部の13%である。

4 口径20.6cm、残存高5.9cmを計る弥生式土器壺。胎土は白色砂粒・雲母等細かい砂粒を含み、焼成は良好で、色調は淡黄褐色・黒褐色で、外面は煤けている。口縁端部と胴部外面に縄文（無節？）が施文されている。残存率は胴上部の15%である。

5 口径12.6cm、残存高14.3cmを計る弥生式土器壺。胎土は白色砂粒・雲母等細かい砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面は暗褐色で、煤けていて、内面は淡褐色である。口縁端部は刻みがあり、胴部外面は縄文（L-R）が施文されている。残存率は20%である。

6 底径7.6cm、残存高8.5cmを計る土師器壺。胎土は白色砂粒・雲母等細かい砂粒を含み、焼成は良好で、色調は淡褐色である。残存率は胴下部の25%である。

VI 調査のまとめ

(弥生時代)

女塚4号墳の周溝から弥生式土器（壺と甕）が出土しているが、住居跡等明確な遺構を伴って出土していなかった。近隣に所在する北島遺跡や天神遺跡でも、本遺跡と同様な状態で弥生式土器が出土している。このことにより、本遺跡の周辺には、規模の小さな集落が点在しているのではないかと考えられる。

(古墳時代)

女塚遺跡の北側に、女塚古墳群が所在し、2基の帆立貝式古墳と5基の円墳の計7基の古墳が確認されているが、今回の女塚4号墳の調査は昭和56年度調査部分の南東部にあたり、周溝跡と石室跡が検出された。前回の調査のとき、墳丘は削平されていて、埴輪が樹立された状態で残存していなかったが、直径18mを計る古墳と確認された。今回の調査部分も墳丘は削平され、埴輪はバラバラの状態で検出されたが、周溝の内側に幅30cm前後の溝が、同心円状に巡っていることが新たに確認された。C-24グリッドの溝の部分には埴輪片が集中して残存し、その他の場所でも埴輪片が残存していたので、この溝は、埴輪を樹立するラインの可能性があると考えられる。

(奈良・平安時代)

女塚遺跡からは9世紀代の遺構が多數検出され、特に12号溝・16号溝から「大倉寺」という文字の書かれた墨書き土器（土師器环）が出土したことが注目される。

掘立柱建物跡が2棟検出され、その建物を開むように溝が検出された。Q・R-3・4グリッドの土坑群は攪乱を受けてはっきりしない部分もあるが、掘立柱建物跡の可能性が高く、調査区域内に3棟の建物があったと思われる。

1号掘立柱建物跡の南側O・P-4グリッドから焼土が出土し、2号掘立柱建物跡の南側で、Q-4グリッドの12号溝及びその周辺からも焼土と炭化物が出土した。これらのことにより、堀立柱建物跡は大規模な火災を受けたと考えられる。

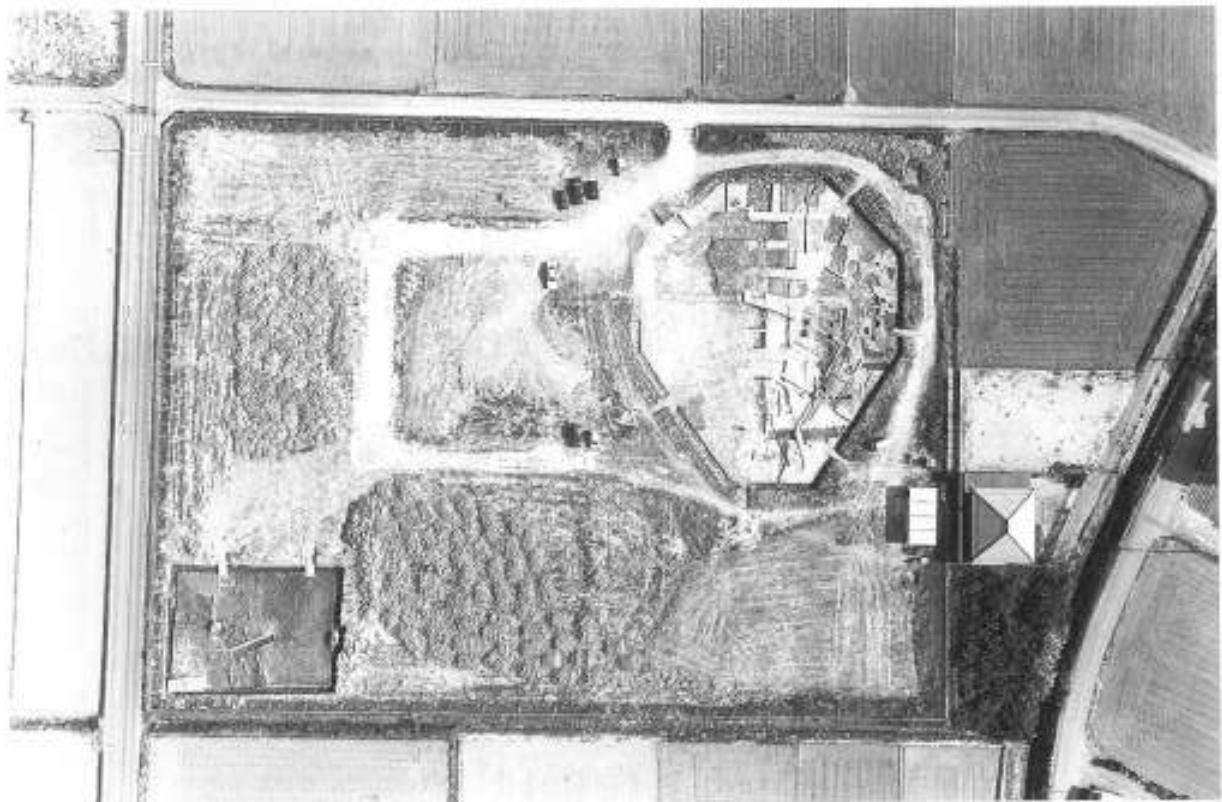
本遺跡の南に位置する北島遺跡の第2地点からは9世紀代の大型の掘立柱建物跡や大型住居跡が検出され、第8地点からは掘立柱建物跡から「寶」という墨書き土器が出土している。南東に当たる第10地点からは、住居跡から「南家」などの墨書き土器が出土している。この「南家」という墨書き土器から考えると、本遺跡を中心として、南に存在するので「南家」という墨書き土器があったのかもしれない。

今回の調査で、本遺跡から瓦は検出されなかつたので、市内にある西別府廃寺のように瓦を葺いた寺院ではないが、北島遺跡などの集落の核となっていた寺があつたのではないかと推定される。

参考文献

- 浅野晴樹 1989『北島遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第81集
中村倉司 1989『北島遺跡(Ⅱ)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第88集

女塚遺跡・女塚4号墳
写真図版



1 女塚遺跡・女塚 4 号墳航空写真



2 女塚遺跡航空写真

図版2



1 1号掘立柱建物跡



2 1号集石遺構



1 2号掘立柱建物跡



2 1号住居跡

図版 4

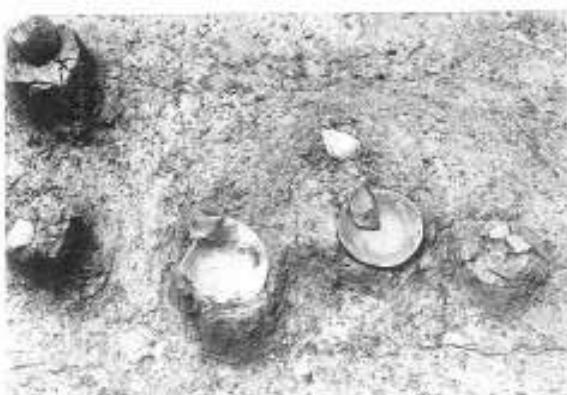


1 1・5・6号溝



2 1～7号溝

図版5



1 2号溝遺物出土状態



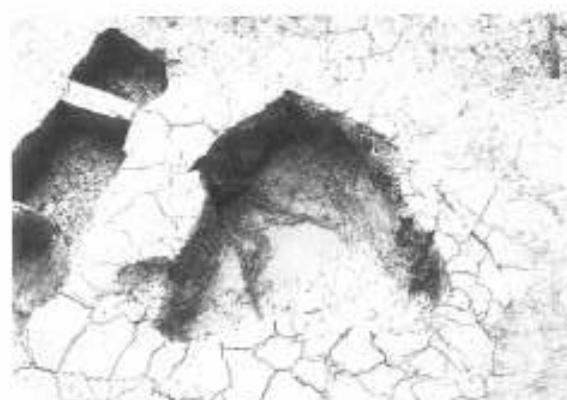
2 16号溝遺物出土状態



3 16号溝遺物出土状態



4 1号土坑



5 2号土坑



6 5号土坑

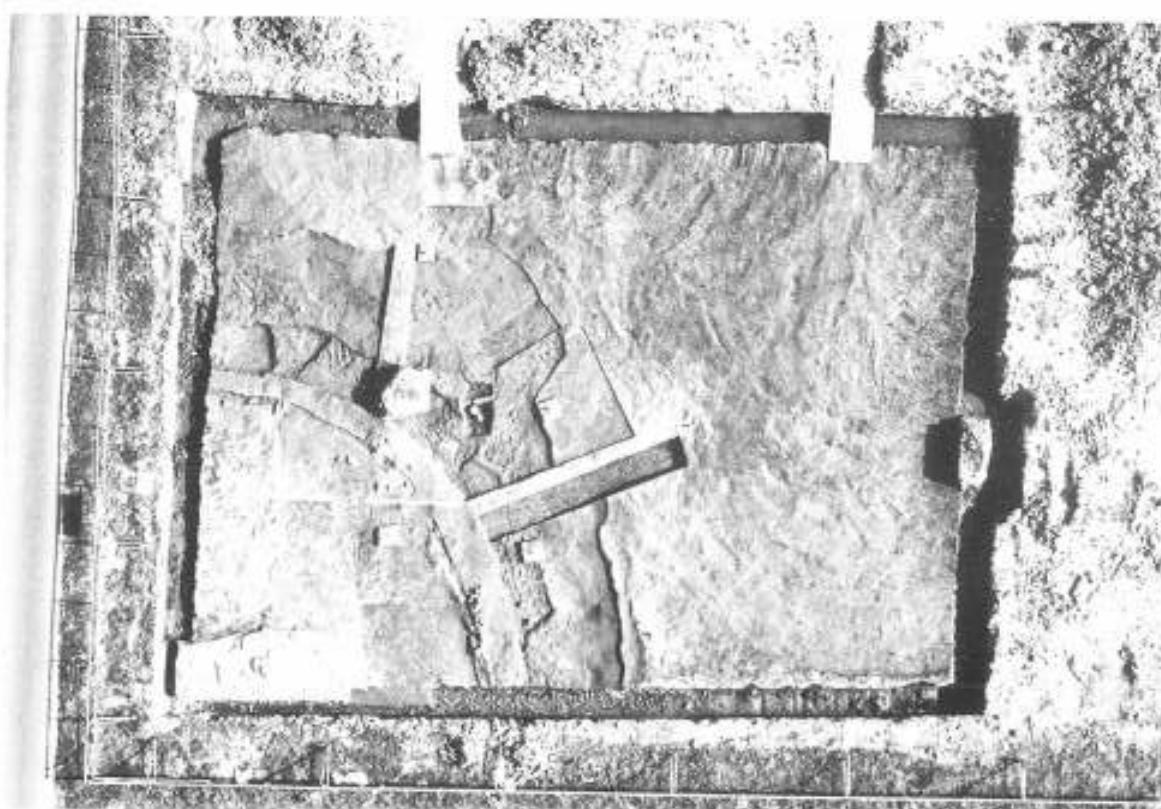


7 8・9号土坑



8 10号土坑

図版 6



1 女塚 4号墳航空写真



2 女塚 4号墳（南から）

図版 7



1 女塚 4号墳（東南から）



2 女塚 4号墳埴輪出土状態

図版 8



1号掘立柱建物跡 8図-3



1号掘立柱建物跡 8図-4



1号掘立柱建物跡 8図-5



1号集石遺構 9図-1



1号集石遺構 9図-2



2号掘立柱建物跡 11図-1



2号掘立柱建物跡 11図-2



2号掘立柱建物跡 11図-4



1号住居跡 13図-2

図版 9



9号溝 20図-1



1号溝 20図-1



2号溝 20図-3



2号溝 20図-4



2号溝 20図-5



2号溝 20図-6



2号溝 20図-7



2号溝 20図-9

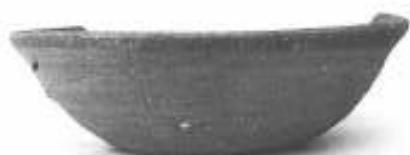


10号溝 23図-2



10号溝 23図-3

图版10



12号溝 23図-4



12号溝 23図-8



12号溝 23図-9



12号溝 23図-11



12号溝 23図-12



12号溝 23図-13



12号溝 23図-12



12号溝 23図-14



14号溝 28図-1



14号溝 28図-2



16号溝 28図-4



16号溝 28図-5



16号溝 28図-7



16号溝 28図-8



16号溝 28図-7



16号溝 28図-8

図版12



16号溝 28図-6



16号溝 28図-9



16号溝 28図-10



16号溝 28図-11



16号溝 28図-12



16号溝 28図-13



16号溝 28図-14



16号溝 28図-15



16号溝 28図-16



16号溝 28図-18

図版13



16号溝 28図-17



Q-5グリッド 31図-2



P-3グリッド 31図-4



N-5グリッド 31図-8



O-3グリッド 31図-9



O-6・P-3・R-5グリッド。16号溝 31図-11



P-6グリッド 31図-12



S-4グリッド 31図-13



T-3・4グリッド 31図-14



Q-5グリッド 31図-15

図版14

女塚4号墳



35図-1



35図-2



35図-5



35図-6



35図-7



35図-8



35図-9



35図-11



35図-12



35図-15



36図-1



36図-2



36図-3



36図-4



36図-5

報告書抄録

ふりがな	めづかいせき・めづか4ごうふん							
書名	女塚遺跡・女塚4号墳							
副書名	平成10年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	金子正之							
編集機関	熊谷市教育委員会							
所在地	〒360-8601 熊谷市宮町2丁目47番地1				TEL 0485-24-1111			
発行年月日	西暦1999(平成11年)2月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (°'")	東經 (°'")	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
めづかいせき 女塚遺跡	さいたまけんくまがやし みねあざいまい 埼玉県熊谷市大字今井 あざめづか 字女塚462	11202	111	36°10'07"	139°24'31"	19970526 ~19971226	1,670	配水場 建設工事
めづか ごうふん 女塚4号墳	さいたまけんくまがやし みねあざいまい 埼玉県熊谷市大字今井 あざめづか 字女塚462	11202	014	36°10'10"	139°24'29"	19971003 ~19971226	600	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
女塚遺跡	集落跡	奈良・平安時代	獨立柱建物跡 2 住居跡 1 溝跡 16 土坑 11	土師器・須恵器・灰釉陶器	溝跡から「大倉寺」という墨書き 土器(土師器坏)が出土し、注目される。			
女塚4号墳	古墳	古墳時代	周溝 1	埴輪片				

平成10年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
女塚遺跡・女塚4号墳

平成11年2月26日発行

発 行／埼玉県熊谷市教育委員会
印 刷／株式会社 博 文 社



さくらのまち“純浴”